

JICA's world

NOVEMBER 2010 No.26

11

NO. _____ DATE _____

TITLE: 5 S Check Sheet

<input checked="" type="checkbox"/> Sort (整理)
<input checked="" type="checkbox"/> Set (整頓)
<input checked="" type="checkbox"/> Shine (清掃)
<input checked="" type="checkbox"/> Standardize (清潔)
<input checked="" type="checkbox"/> Sustain (しつけ)

MEMO

特集

カイゼン from JAPAN



インド北部に位置するラダック。中国の文化大革命によりチベット自治区（本土）の仏教文化が破壊されてきた歴史に比べ、チベット文化が最も継承されていることから、小チベットとも称される。チベット文化を担うのが「ゴンパ」と呼ばれる僧院で、ラダックの人々にとつて僧侶は、尊敬される存在であり心のよりどころでもある。各家庭から一人、僧侶か尼僧を出すのがこの地のしきたりになっている。

それぞれのゴンパではチベット暦に沿って、年に一度の大祭が執り行われる。冬のラダックを旅した際に偶然、岩山の中腹にまるで砦のように建立されたチエムレ僧院で、「アンチョック祭」に出会った。境内に入ると、すでに僧院の屋根の上まで参拝者がぎっしりと詰めかけており、仮面を着けた僧侶による舞いが次々に披露されていた。

さまざまな仮面が登場するため、物語の意味が分からなくても楽しい。日本の祭りと同じく五穀豊穡や無病息災を祈願する意味合いも持っているせいか、なんとなく日本の田舎の祭りに参列しているような感じがした。

2010年は11月4、5日にかけて行われる。

春 夏
秋 冬

26

11月 アンチョック祭

ヒマラヤの 仮面舞踏会



文・写真=船尾 修

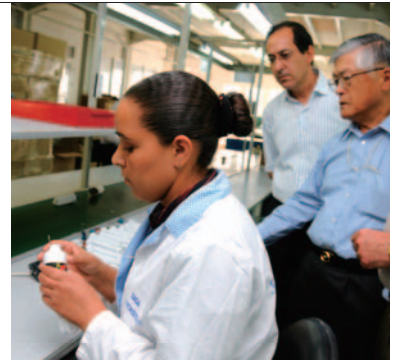
1960年兵庫県出身。アジア・アフリカをフィールドに「地球と人間の関係性」に関する写真作品を制作している。「カミサマホトケサマ」で第9回さがみはら写真新人奨励賞受賞。

Contents

02 春夏秋冬 ヒマラヤの仮面舞踏会 インド

04 特集
カイゼン from JAPAN

「ムリ・ムラ・ムダ」をなくして「楽に・早く・安く」作ろう チュニジア
日本企業の底力を学ぶ ウズベキスタン
“きれいな病院”をアフリカに!
世界に広がるカイゼンMAP



18 ゲンバの風 家木 幸一 シニア海外ボランティア

20 地域と世界のきずな “香川らしい国際協力”で人づくりを 香川県

22 地球号の子どもたち
**けん玉で
世界の未来を描こう**

KTC中央高等学院



24 PLAYERS 当たり前の毎日を視覚障がい者に 社会福祉法人 日本点字図書館

26 ココロとココロ
~届け 私たちの思い~ 村のより良い地域医療のために NPO法人 バングラデシュと手をつなぐ会

28 JICA STAFF 筱 窓香 産業開発部 産業・貿易課

29 JICA UPDATE

30 イチオシ! 本・映画・イベント

31 地球ギャラリー
“真実”という名の村で



39 MONO語り エジプトでモノづくり大作戦!

40 私のなんとかしなげや! 鳥山 雄司 ギタリスト



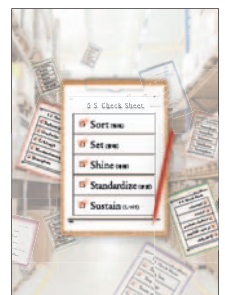
JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙

カイゼン活動の基本となる日本
発の「5S」は、開発途上国の生
産現場などで浸透し始めている。



カイゼン from JAPAN

日本の高度経済成長の原動力の一つとして、
多くの生産現場にプラスの変化を生み出してきた「カイゼン」。
小さな努力の積み重ねが大きな成果を生む、“ヒューマンフレンドリー”な
日本の品質・生産性向上手法が、世界の生産現場で存在感を高めている。

取材協力：政策研究大学院大学 (GRIPS) 大塚啓二郎教授、園部哲史教授

トヨタ生産方式が 各国企業のベンチマークに

トヨタ、ホンダ、ソニー、東芝……。世界に名だたる日本の大企業も、かつては小さな町工場として始まった。それから長い年月をかけ、今の地位を築き上げてきたのは、技術や製品の改良、品質や生産性の向上といった地道な企業努力があったからにはかならない。

こうした日本の製造業の発展過程において、大きな役割を果たしてきたのが、日本人なら一度は耳にしたことがあるであろう「カイゼン」活動。これまで多くの企業で、それぞれの分野や規模、生産環境などに応じた方法で、品質や生産性を向上させるための取り組みが実践されてきた。カイゼンは、日本で独自に進化を遂げてきたそうした多くの手法の総称であり、戦後の高度経済成長を生産現場から支えてきた。

中でも象徴的なのが、世界のトヨタ。こと、トヨタ自動車工業株式会社が確立してきた、「トヨタ生産方式」。在庫を持たず、必要なものを必要なだけ、必要な時に生産する「ジャストインタイム」や、効率的・合理的な生産を行う上でなくすべき「7つのムダ」※1、生産現場の状況や課題となっていることをデータやグラフなどで分かりやすく示し、生産者の間での円滑な情報共有を図る「見える化」など、さまざまな手法を体系化。これを実践することで、トヨタは世界で1、2を争う自動車メーカーへと成長した。

アメリカ生まれ、 日本育ち!?

カイゼンが日本で発展するきっかけは、戦後間もない時期、アメリカで使われていた製造業の品質管理手法が伝えられたことだった。1950年、日本の国勢調査の企画立案に携わっていた統計学者のエドワーズ・デミング博士が、統計学を用いた品質管理を日本の企業経営者や技術者に指導。これを取り入れた多くの企業が、工程を見直して品質のバラツキを抑えることで、生産性の向上に成功する。そして60、70年代には、この手法を基礎に、設備の改良、新工具の開発、不良品の削減、整理整頓、作業の安全性確保など、あらゆる生産工程で改善が続けられ、その中から「5S」※2や「TQC」※3といった、カイゼンの根幹を成す日本独自の優れた取り組みが数多く生まれた。

カイゼン活動を多くの日本企業が採用するようになった80年代以降になると、アメリカを中心とする産業先進国の企業も、日本の製造業躍進の原動力となったTQCやトヨタ生産方式などに注目。それを学んで自社に導入し始め、カイゼン手法は国際的にも認知されるようになった。モノづくり大国・日本の屋台骨を支えてきたカイゼンが、世界に広く認められたのだ。

※1 作り過ぎのムダ、手待ちのムダ、運搬のムダ、加工のムダ、在庫のムダ、動作のムダ、不良品のムダ。
※2 7ページ参照。

※3 Total Quality Controlの略。製造部門で行われる品質管理の手法を、それ以外の部門にも適用し、全社的に取り組む企業の統合的品質管理のこと。

ボトムアップが生み出す 大きな変化

「カイゼンのスタンスは、『現状』を踏まえてできることから始めよう、というもの。高価で革新的な設備などの投資は、必ずしも必要ではありません。そう話すのは、カイゼンに造詣が深く、アジアやアフリカの産業振興支援にも携わる、政策研究大学院大学（GRIPS）の大塚啓二郎教授。「日本の製造現場では、作業者が小グループを作って問題点について話し合い、アイデアを出しながら現場の視点に立った改善策を見いだしてきました。カイゼンは、あくまで働く人間が主役。こうした『ボトムアップ』型のアプローチが、一人一人のモチベーションやモラル、チームワークの向上へとつながり、優れた品質や生産性を実現してきたのです」。

「カイゼンのスタンスは、『現状』を踏まえてできることから始めよう、というもの。高価で革新的な設備などの投資は、必ずしも必要ではありません。そう話すのは、カイゼンに造詣が深く、アジアやアフリカの産業振興支援にも携わる、政策研究大学院大学（GRIPS）の大塚啓二郎教授。「日本の製造現場では、作業者が小グループを作って問題点について話し合い、アイデアを出しながら現場の視点に立った改善策を見いだしてきました。カイゼンは、あくまで働く人間が主役。こうした『ボトムアップ』型のアプローチが、一人一人のモチベーションやモラル、チームワークの向上へとつながり、優れた品質や生産性を実現してきたのです」。

途上国へ拡大 JICAも後押し

世界に目を向ければ、多くの途上国ではいまだ産業が十分に発展しておらず、雇用の拡大や貧困削減、国全体の経済基盤や競争力の強化が大きな課題となっている。そうした中、途上国の産業振興や中小企業の育成に力を入れるJICAは、83年にシンガポールで生産性向上支援を開始したのを皮切りに、世界各国でカイゼンを活用した製

造業の品質や生産性の向上、中小企業の経営改善、さらには途上国でカイゼンの普及を担う人材の育成、組織・体制の強化などに取り組んでいる。これは、技術面を指導する専門家や製造現場での豊富な経験を持つシニア海外ボランティアの派遣、カイゼンに努めた業績を上げている日本の企業の視察・研修などを通じて実施。そして長年のこうした協力が実り、途上国の企業にもカイゼンの概念が広く知られるようになった。

開発経済学が専門の園部哲史GRIPS教授は、「カイゼンは職場の全員が参加でき、努力の成果を実感、共感しやすいため、ヒューマンフレンドリィで継続性も高い。また、チームワークや社員の自立性、創造性を育てるなど、人材育成にも効果的です」と、カイゼンを通じて途上国での支援の意義を強調する。最近はそのようなカイゼンのユ

ニバーサルな特性を生かし、企業の生産現場のみならず、行政や保健・医療、教育といったさまざまな分野でも、「5S」をはじめとするカイゼンを活用した支援がJICAによって実施されている。

ちょっとしたアイデアや工夫、小さな努力の積み重ねが、大きな成果を生み出すカイゼン。モノづくり大国・日本が世界に誇る「ブランド」の一つとして、今後ますます世界に広がっていくに違いない。



JICAの協力により、きれいに管理されるようになったタンザニアムベヤ病院のカルテ(P14)に関連記事

フランス語

1. Trier-Débarasser
2. Etablir-Ordonner
3. Lustrer
4. Standardiser
5. Perenniser

アラビア語

1. تصنيف
2. ترتيب
3. تنظيف مستمر
4. توحيد المعايير
5. الانضباط

ヒンディー語

1. संगठन
2. देखरेख
3. सफाई
4. स्वच्छता
5. अनुशासन

スペイン語

1. Descarte
2. Orden
3. Limpieza
4. Estandarización
5. Disciplina

ベトナム語

1. Sàng lọc
2. Sắp xếp
3. Sạch sẽ
4. Sơn sóc
5. Sơn song

インドネシア語

1. Keteraturan
2. Kerapian
3. Kebersihan
4. Kelestarian
5. Kedisiplinan

タイ語

1. สะสาง
2. สะดวก
3. สะอาด
4. สุขลักษณะ
5. สร้างนิสัย

スワヒリ語

1. Sasambua
2. Seti
3. Safisha
4. Sanifisha
5. shikilia

英語

1. Sort
2. Set
3. Shine
4. Standardize
5. Sustain

ポルトガル語

1. Senso de utilização
2. Senso de ordenação
3. Senso de limpeza
4. Senso de normalização
5. Senso de autodisciplina

アムハラ語

1. ጥገና
2. ጥረቀቃ
3. ጥራት
4. ጥሰታ
5. ጥዘታ

トルコ語

1. Sınıflandırma
2. Düzenleme
3. Standartlaştırma
4. Temizlik
5. Disiplin

クメール語

1. សម្របសម្រួល
2. សណ្តាប់ធ្នាប់
3. ស្អាត
4. ស្តង់ដារ
5. ស្ម័គ្រចិត្ត

クロアチア語

1. Definicija
2. Uredenje
3. Čišćenje
4. Standardizacija
5. Disciplina

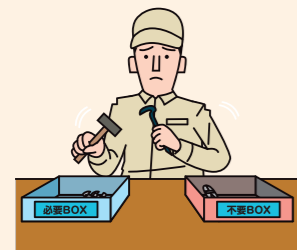
モンテネグロ語

セルビア語

ボスニア語

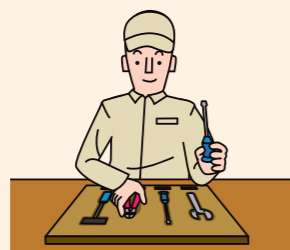
カイゼン活動の基礎 「5S」とは!?

品質・生産性の向上を目的に、モノやサービスの生産現場で行われているカイゼン活動。その最も基礎的な取り組みが「5S」だ。高度経済成長を支えた日本発の5Sは今、各国の言語に翻訳され、浸透し始めている。



1. 整理 (Seiri)

使うモノと使わないモノを分ける



2. 整頓 (Seiton)

使うモノを決めた場所に置く



3. 清掃 (Seisou)

使うモノを掃除する&故障していないかをチェック



4. 清潔 (Seiketsu)

整理・整頓・清掃の3Sを維持する



5. しつけ (Shitsuke)

整理・整頓・清掃・清潔の4Sを徹底・継続させるための習慣づけ



チュニス湖に隔てられたチュニス大都市圏の南北を結ぶ「ラデス-ラグレット橋」。日本の円借款を通じて建設され、2009年3月に開通



ベン・ファルハットUGPQ所長(中央)やコンサルタントは日本での研修にも参加。「日本の企業では「まだまだ改善の余地がある」という話をたくさん聞きました。産業が世界トップレベルになってまだまだ満足していないんです。私たちももっと高い経済成長を果たすために、こうした姿勢を日本から学びたい」

ところが、最初からうまくはいかなかった。組織マネジメントの経験がない上、各コンサルタントの技術水準が低く、企業に対する実効性のある提案の種類が限られていたのだ。

そこで、白羽の矢が立ったのが日本だった。「日本企業には、品質・生産性向上に関するたくさんのお話がある」と語るのはUGPQのベン・ファルハット所長。「アプローチがシンプル以上に、低コストで即効性の高い日本のノウハウを知りたかった」。

チュニジア政府からの要請を受け、JICAは「日本の強み」である「カイゼン活動」を生かした協力を開始。シニア海外ボランティアの派遣や日本への研修員受け入れなどを行ってきた。06年からは開発調査「品質／生産性向上マスタープラン調査」を実施。関係機関や企業との面談を通じて中小企業の課題を洗い出し、今後取り組むべき方向性を提案した。さらに09年に技術協力プロジェクト「品質／生産性向上プロジェクト」をスタートし、品質・生産性向上に向けた取り組みを各企業に指導・普及する体制を整えることになった。



プロジェクトの対象企業となったSOFIMA社の工場診断。自動車のエアフィルターを製造する同社を訪れ、「ムダが見逃さない」と言わんばかりの鋭い目線で、プレス加工を見つめる土屋茂機・JICA専門家(左)

地中海からサハラ砂漠まで多彩な顔を持つ観光立国のチュニジア。チュニス郊外の人気スポット・シディブサイドは、チュニジアンブルーを施した白い壁の家が立ち並び、ヨーロッパなどからのツアー客でいつもにぎわう

れた。日に日に増える、安くて高性能な商品に街は歓迎ムードが高まる一方、それまで国策で保護されてきた国内メーカーは激しい国際競争にさらされた。このままでは破たんしてしまう。世界に通用する製品を作らなければ。

特に、経営基盤が脆弱な中小企業は、津波にのみ込まれるような思いだった。「いいモノを安く作ること」は企業努力の範囲だが、品質・生産性向上に関しては、限界があった。こうした問題がいざ起る

ことを認識していたチュニジア政府は、1995年に「産業レベルアップ計画」を策定。中小企業の支援策として、品質管理や生産効率を高めるための取り組みを推進してきた。さらに同年、その実行部隊となる「国家品質事業管理ユニット(UGPQ)」を産業・技術省下に設置。同省からの行政官3人と、「機械・電気産業技術センター(CETIM)」や「包装技術センター(PACTEC)」といった産業別に設けられた8つの技術センターのコンサルタント8人の計11人で船出を迎えた。



SIAME社で数日前から稼働した省エネランプの組み立てライン。女性たちが一つ一つ手作業で部品を取り付けていく。赤い箱に入っているのが不良品。その数の多さに池田克登志・JICA専門家は「不良品を作ること自体がムダ。作業を始める前に4M+1Iをチェックすべき」と指摘する。4Mとは、材料(Material)、作業員(Man)、方法(Method)、機械(Machine)、1Iとは生産情報(Information)



「日本のサクセスストーリーをもっと知りたい」

ローマから飛行機でわずか1時間。ヨーロッパに程近い北アフリカのチュニジアは、アラブ人の伝統的な暮らしが息づく反面、どこか欧州の香り漂う街並みが続く。10月初旬の首都チュニスは、40度にも達した灼熱の夏が過ぎ、心地よい秋風が吹き始めていた。庶民でにぎわうスーパーマーケットには、家電製品などヨーロッパからの輸入品が数多く陳列されている。

チュニジアは2008年にEU(欧州連合)とのパートナーシップ協定を締結、この年から工業製品の関税が完全に撤廃さ

「ムリ・ムラ・ムダ」をなくして「楽に・早く・安く」作ろう

EU(欧州連合)製品に対する関税の撤廃で、チュニジアでは安くて高性能・高品質の輸入品が至るところで見られるようになった。今、この国に求められるのは、国際競争に負けない強い国内メーカーの育成だ。その秘策として、JICAの支援を通じて導入され始めているのが、日本の「カイゼン」。10月初旬、この協力の最前線を訪ねた。

(右)作業機に立てられた看板にアラビア語で書かれている「品質管理のための心得」
(左)SIAME社の品質・管理サブマネージャー、ソフィアンさんの執務室は5Sが徹底され、
ファイルなどもきちんと管理されている



品・途中製品の在庫を抱えながら生産し、かつムダな動きも多いこの生産方式だと、不良品が出たときに多くの手直しが発生してしまいます。安い部品ならまだしも、高額ならば経営を圧迫しかねません。

そこで池田専門家は、1個ずつ生産して1個ずつ次の工程へ送ることで、「人・設備・材料」や「ムリ・ムラ・ムダ」を最小化する「1個流し生産」の導入を提案。この1年間でCETIMEのコンサルタントが10回にわたって訪問し、うち6回は池田専門家が同行。「必要なモノを必要な時に必要なだけ作る『ジャストインタイム』や、不



「一本のラインの成功が従業員にもいい影響を与え、ラインごとに競争意識が生まれました」と話すJAEGERのポウドゥマ社長

3つの「現」でムダを見抜く

「製品が完成するまでの距離は170メートルから72メートルに、必要な人員は6人から4人に減りました。機械や従業員の配置換えなどのちよつとした工夫で、ここまで作業効率を高め、人件費を削減できると思っていました」

こう話すのは、欧州向けのガラス製クッキングプレートなどを製造するJAEGER CONTROL SYSTEMS社（チュニジア）のワッシム・ポウドゥマ社長。30代とまだ若手ながらも、JICAのプロジェクトをきっかけに、高い統率力でカイゼン活動の積極的な導入を図り、成果を挙げてきた企業の一つだ。「07年末の世界金融危機のおおりの受け、コスト

ダウンはわれわれの大きな課題でした。でも、十分な予算やノウハウがなかったし、どう従業員を巻き込んだらいいのかも分からなかった。だからプロジェクトの話聞いたとき、真っ先に手を挙げたんです」。

最初に取り組んだのは、生産ラインのレイアウト改善。「半年前は生産工程が、スバゲティのようにごちゃごちゃで、製品が同じ場所を行ったり来たりとムダが多かった」と土屋茂機・JICA専門家は振り返る。しかし、土屋専門家とCETIMEのコンサルタントが訪問指導を繰り返したおかげで、現在の工場内は見るからに、すっきり。生産ラインもスバゲティ型からシンプルなU字型に変更され、整然と並べられた機械の前で従業員が黙々と作業に励んでいた。「この会社は本当に頑張っています。私たちが指導しなくても、もう大丈夫」と、土屋専門家も太鼓判を押すほどだ。

このようにコンサルタントがJICA専門家と対象企業を回り、診断やカイゼン提案を行う「実地訓練」を重視しているのがこのプロジェクトの特徴だ。というのもカイゼンの手法は、レイアウト改善、作業員数の最小化、5S、SME^{※1}、QCサークル^{※2}、トヨタ生産方式^{※3}……とさまざま。どの手法でカイゼンを図るかは、業種や経営方針、工場内の現状などによって企業ごとに異なるからだ。



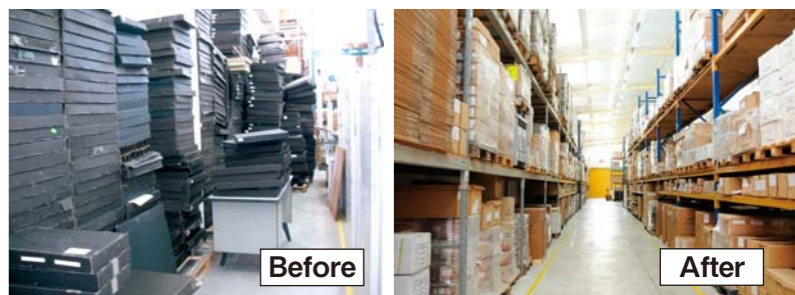
生産性が138%アップしたSIAME社の電力計の組み立てライン。学校の教室のようなレイアウトの「バッチ生産」(上)を「1個流し生産」(下)に変更し、半分程度のスペースで済むようになった

「机上の知識だけでは不十分です。本物の実力をつけるには、現場・現実・現物の3つの『現』でムダを見抜くことが大切」。池田克登志・JICA専門家もそう強調する。

生産性運動の トップランナーが指導

09年に始まったこの技術協力プロジェクトを率いる専門家チームは皆、公益財団法人日本生産性本部の面々だ。その名の通り同財団は、「生産性運動」の推進により日本経済の発展に大きな役割を果たしてきた。現在も、国内向けの企業診断やコンサルタント養成を行っており、まさに品質・生産性向上の「トップランナー」ともいえる。彼らの指導に触発されたのか、「いつか私たちも、日本生産性本部のような組織をつくりたい」とベン・ファルハットUGPQ所長も熱弁を振るう。

翌日、池田専門家とともに向かったのは、ガスメーターや電力計などを生産するSIAME社だ。76年に創業した同社は、以前から「品質・環境管理部門」を設け、自主的に顧客満足度を高めるための商品づくりに努めてきた。「ISO9001」や



以前は在庫や製品が無秩序にうずたかく積まれていたJAEGER社の倉庫(左)。カイゼン後は見違えるように整頓され、「どこに」「何が」「どれだけ」あるかが一目で分かるようになった

「TS16949」といった品質マネジメントに関する国際規格の認証も受けている」とハビブ・アイウニ部長。その表情はどこか誇らしげだ。

だが、長年にわたり国内外の工場でも品質・生産性向上に取り組んできた池田専門家の目は、あちこちにある「ムダ」を見逃さなかった。「特に目立ったのは不良品率が異常に高いこと。生産方式に大きな問題がありました」。

原因は、電力計の組み立てラインにおける「バッチ生産」にあった。「工程ごとに大量の部

良品が発生した際に作業を自動停止する『自動化』というトヨタ生産方式の2本柱を徹底的に学んでもらった」。

その結果、驚異的な効果が表れる。3人の人員削減に成功したにもかかわらず、1時間当たりの生産量が60台から100台に増加。一人当たりの生産性は6台から14.2台と、「138%アップ」を果たした。また、高かった不良品率も5%から2%へと減少している。

徐々に浸透する 「カイゼン」への意識

「最初の2〜3回は何を言っても理解してもらえず、彼らにはできない理由ばかりを並べていました。でも、回を重ねるうち

に意識にも変化が表れ、ほかのカイゼンにも取り組むようになりました。今では『こっちのラインも見てくれないか?』と積極的に聞いてくるほど」(池田専門家)。喜ばしい変化だ。「人員削減は雇用問題になるのでは?」という疑問には、「品質や生産効率が良くなると、クライアントからも信頼され、またコストが下がり競争力がつくので発注量の増加や新規受注につながる。その結果、あふれた人員は新たなラインで働いてもらうこともできる」と池田専門家が答えてくれた。

さらに、実地訓練で日本人専門家の「鋭い目」を間近に感じてきたコンサルタントたちはこう話す。「一つ一つのプロセス

を大切にする日本人の我慢強さや丁寧さ。まさにカイゼンの基本姿勢だと思えます」とCETIMEのヘラ・フマイドさん。また、池田専門家とSIAME社の指導に当たってきたCETIMEのラムジ・エル・メタハミムさんは「問題点をあつという間に発見できるのは、長い実務経験があつてこそ。私もMr. IKEDAのように経験を積み上げていきたい」と抱負を語る。

こうしたチュニジアの成功体験に、周辺国も注目している。今年1月にはエチオピアの視察団が訪れ、今度はエジプトも訪問を希望しているそうだ。「カイゼンを導入する各国の取り組みが共有される中で、それぞれの国の関係者が自国が置かれた状況下でベストのモデルを模索していくことが望ましい。JICAはそれを『促進』していきたい」。JICAチュニジア事務所長の橋口道代所長も期待を膨らませる。

「ムリ・ムラ・ムダ」をなくして「楽に・早く・安く」製品を作るための「カイゼン活動」は、地味で地道なもの。しかし、国際競争に負けない強い企業を育てていくためには、何も増して大切な取り組みだ。



チュニジアの機械・電気電子技術の開発・普及に努めるCETIMEのフェリド・ヘレリ所長。JICAはCETIMEに対し、同プロジェクト以前からコンサルタントの研修などを支援してきた。「コンサルタントの育成システムでは日本から多くのことを学びました。それを生かし、アフリカ各国からコンサルタントを受け入れて独自に研修も実施しています」

※1 Single-Minute Exchange of Dieの略。10分以内で機械の金型を交換する手法。
※2 品質向上のための活動を職場内の小グループで継続的に行うこと。QCはQuality Controlの略。
※3 ムダの徹底排除と製造方法の合理性を追求した製造現場での生産方式。トヨタ自動車工業株式会社の元副社長・大野耐一氏が提唱。

JICA大阪は2002年、ウズベキスタンに加えて、カザフスタン、キルギス、ベトナム、ラオスの日本センターのビジネスコースで生産性向上などを学ぶ企業家を対象にしたビジネス実務研修をスタート。これまで150人以上が、日本企業のカイゼンの現場を視察してきた。

「私たちの会社は、3S活動を徹底しています！」
広い空間に整然と並べられた機械のそばで、社員がてきぱきと作業をしている。その横に目をやると壁に大きなパネルが。金づちやペンチなどの工具が、線を描くように一つ一つきれいに掛けられている。
7月下旬、大阪府東大阪市の工業地帯の一角、榎木金属工業株式会社を訪問したウズベキ

「もちろん、日本のやり方がそのまま適用できるわけではありません。カイゼンのノウハウを自分なりに理解し、各企業に合ったアクションを見つけ出してもらうことが狙いです」と、研修を担当する財団法人太平洋人材交流センター国際交流部担当部長の瀬戸口恵美子さんは話す。
8年にわたる協力の成果は、徐々に現れ始めている。JICAは今年3月、これまでの研修の成果を振り返るためにフォロ

「もちろん、日本のやり方がそのまま適用できるわけではありません。カイゼンのノウハウを自分なりに理解し、各企業に合ったアクションを見つけ出してもらうことが狙いです」と、研修を担当する財団法人太平洋人材交流センター国際交流部担当部長の瀬戸口恵美子さんは話す。
8年にわたる協力の成果は、徐々に現れ始めている。JICAは今年3月、これまでの研修の成果を振り返るためにフォロ

「もちろん、日本のやり方がそのまま適用できるわけではありません。カイゼンのノウハウを自分なりに理解し、各企業に合ったアクションを見つけ出してもらうことが狙いです」と、研修を担当する財団法人太平洋人材交流センター国際交流部担当部長の瀬戸口恵美子さんは話す。
8年にわたる協力の成果は、徐々に現れ始めている。JICAは今年3月、これまでの研修の成果を振り返るためにフォロ

「もちろん、日本のやり方がそのまま適用できるわけではありません。カイゼンのノウハウを自分なりに理解し、各企業に合ったアクションを見つけ出してもらうことが狙いです」と、研修を担当する財団法人太平洋人材交流センター国際交流部担当部長の瀬戸口恵美子さんは話す。
8年にわたる協力の成果は、徐々に現れ始めている。JICAは今年3月、これまでの研修の成果を振り返るためにフォロ



有限会社安久工機では、社長から経営戦略についても説明を受けた

社員の手で生み出す カイゼン活動

日本企業の底力を学ぶ

長年にわたって、日本企業の発展を支えてきたカイゼン活動。その実践の場をこの目で確かめようと、中央アジアのウズベキスタンからビジネスマンの研修員たちがやって来た。



スタンのビジネスマン。同社は創業94年、社内業務のあらゆる場面で「整理、整頓、清掃」の3Sを推進。社員一人一人の地道な努力により、「技術」と「生産性」において、日本の金属加工業でトップレベルを維持してきた。
今回、来日したのはJICAが運営を支援する「ウズベキスタン日本人材開発センター（通称・日本センター※）」が開講するビジネスコースの成績優秀者6人。5カ月にわたり、生産管理やマーケティングなど基本的な

ビジネススキル、日本の企業理念や経営方法などの理論を徹底的に学んだ後、JICA大阪が実施する「ビジネス実務研修」に参加。フィールドワークの一環として、関西を中心に10数社の企業を訪問し、経営幹部からは経営ノウハウを、社員からは業務を効率的に進める「カイゼン」の工夫を教わった。
この日は、常務取締役の榎木孝至さんの引率の下、榎木流カイゼン活動の現場を視察。「必要なものが、いつでも、誰にでも、すぐに取り出せることが大

「もちろん、日本のやり方がそのまま適用できるわけではありません。カイゼンのノウハウを自分なりに理解し、各企業に合ったアクションを見つけ出してもらうことが狙いです」と、研修を担当する財団法人太平洋人材交流センター国際交流部担当部長の瀬戸口恵美子さんは話す。
8年にわたる協力の成果は、徐々に現れ始めている。JICAは今年3月、これまでの研修の成果を振り返るためにフォロ

来のやり方を簡単には変えられない苦労がありながらも、日本の研修で学んだことを確実に生かしていた」と、現地での当たりとした彼らの努力を強調する。従業員のみーティングを定例化したり、新たに掃除の時間を設けたり。至る所でたくさんの変化が起こっていた。

(上)イトアンド株式会社が開講する大阪王将のぎょうざ作りを体験
(下)榎木金属工業の社員から、工具整理パネルについて説明を受ける研修員たち



ウズベキスタンの研修員、スチリナ・マリナさんから送られてきた写真。日本で視察した工具の整理ボードや庭掃除など、早速カイゼン活動を始めていた

そして今回の研修から1カ月後、参加者の一人であるスチリナ・マリナさんから便りが届いた。機械の開発・製造を行う企業で財務関連の業務を担う彼女は「少しずつできることから始めています」と、工具をパネルに整理した写真などを送ってくれた。他方、視察先となった日本の企業側からは、研修員の受け入れを通じて、「社内でも取り組んできたカイゼン活動が、海外の企業でも役立つ普遍的なものであることを再認識した」との声も聞かれる。
日本の企業を支えてきたカイゼン活動は、海を越えて、世界各地に確実に広まっている。

※市場経済化を担う人材育成の拠点として、JICAの支援を通じて、8カ国9カ所（ウクライナ、ウズベキスタン、カザフスタン、カンボジア、キルギス、ベトナム、モンゴル、ラオス）に設立。技術協力プロジェクトによりJICAが運営を支援している。

切。使用する工具はすべて、皆が見える場所に置いて管理しています」と説明してくれた。辺りを見回すと、工場内にはほこり一つない。「ピカピカ」という言葉がびびったりだ。一つ一つの取り組みがすべて、生産性向上につながっているのだ。
「社員がカイゼンの必要性を認識すること。そして、彼ら自身がアクションを提案し、実行できるような体制を整えることが大きな一歩なのです」。榎木さんの言葉に、6人の研修員たちは深くうなずいていた。

商品を消費者に浸透させるため、調理方法などについての提案活動を行うマロニー株式会社



巡回指導中、アデラ看護師長にアドバイスをする石島専門家

「きれいな病院」をアフリカに！

医薬品やカルテの整理・整頓など「5S」の推進によって、病院スタッフが働きやすい環境づくりに努め、さらに「カイゼン」によって効率的な診療活動や患者が安心できる医療体制を実現したスリランカの病院。その経験が今、遠くサハラ以南アフリカにも伝わり、各国で「きれいな病院」を広げる取り組みが始まっている。

スリランカの取り組みから学ぶ

薬が種類ごとに整然と並べられた薬品棚。床に張られたテープに沿って、決められた位置にきちんと配置された車いす。「何がどこにあるかすぐに分かり、とても働きやすくなりました」

タンザニア最大の都市・ダル

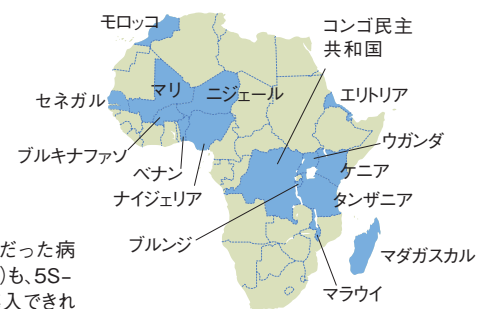
エスサラームから車で南に約12時間、ムベヤ病院の看護師が笑顔で話す。以前は、使用済みの医療器具や薬品が所構わず放置されていたというこの病院。業務効率も悪く、一日待っても診察を受けられない患者も多かった。そんなムベヤ病院を大きく生まれ変わ

らせたのが、日本の製造現場から生まれた「5S」と「カイゼン」。「今では待たされる時間も短くなり、医師や看護師の対応も良くなった。そして何より、清潔な病院は安心」と患者からも喜ばれている。

アフリカのすべての病院に5S-カイゼンを。そんな願いと

もに、JICAが2007年からサハラ以南アフリカの国々で実施しているのが「きれいな病院プログラム」。保健・医療機材が極端に不足しているこの地域に対して、保健・医療を担当する行政官、医師や看護師といった医療従事者に対する研修やセミナー、JICA専門家と保健省担当官による巡回指導などを行い、5S-カイゼンを活用した医療サービスの質の向上を後押ししている。これまでに、日本の病院や大学の教授陣などの協力の下で、タンザニアをはじめアフリカ15カ国で展開されており、各国で一つずつモデル病院を選び、そこを拠点に国内への普及が進められている。

きれいな病院プログラム実施国



以前は乱雑だった病院内の棚(上)も、5S-カイゼンの導入できれいに整理され(下)、業務効率の向上につながった



たアフリカの研修員たちは、大きな衝撃を受けた。

変化を生み出すのは一人一人の意識改革

「何か気になる点がありますか？」

「入院患者の回診に使う薬剤が、時々補充されていないようです。毎回、回診後に確認できる仕組みをつくってみては？」

タンザニアのモデル病院であるムベヤ病院の一室で、医師や看護師たちが何やら真剣な表情で話し合っていた。彼らは、各部門の代表者で構成される「業務改善チーム」のメンバー。5Sによる職場環境の改善、そして5Sを踏まえた診療活動や医療体制などのカイゼンを図るため、職員から募った意見やアイデアを参考に改善策を定期的に協議

している。「この活動がスタートしてから、『自分たちの意見が必要されている』と職員が実感するようになり、仕事への姿勢も前向きになりました」と看護師長のアデラ・ムブラさん。これまでに、病棟の整理整頓の達成状況が一目で分かるボードを作成するなど、一人一人の問題意識の高まりが形となってさまざまな効果を生んでいる。

そんなムベヤ病院の取り組みは、国内各地の病院にも着実に広がっている。その数は全国37カ所。巡回指導などで精力的に各病院を飛び回る石島久裕・JICA専門家も、「金銭的な余裕がなくても、多くの病院ができることから始めようと努力している。その様子を見るのは、自分にとっても大きなやりがいとなっています」と話す。

一方、青年海外協力隊(保健分野)の多くも、各国の医療施設で5S-カイゼンの普及に努めている。ウガンダのモデル病院・トロロ病院では、協力隊員で保健師の小林絵梨さんが、5S-カイゼンに対する理解を深めようと、さまざまな活動を展開。整理整頓の推進や、病院内の5S-カイゼンに関するトレーニングや

ニューズレターの発行などを行っている。

「以前は問題だと認識していながら何の手も打とうとしなかった記録の不備も、最近自分たちで指摘し合うようになるなど、職員の意識も変わってきているようです」と小林さん。視察に訪れる他の病院関係者の良き手本となるよう、「ゆっくりでもいいので着実に」病院内のカイゼンを進めていくつもりだ。

「5S-カイゼンはマネジメントの手法としてはとてもシンプルです。長年、プログラムの立ち上げに尽力してきた北海道医療大学の半田祐二郎教授はそう話す。「でも、シンプルな活動が、医療の質を大きく向上させることにつながる。それが、アフリカでも受け入れられた理由でしょう。」

製造現場で生まれた5S-カイゼンは今、保健・医療の世界にも変革を起し始めている。



各部署には、5S-カイゼンの進捗状況を示す掲示板が設けられるようになった



ウガンダのトロロ病院で、病院全体の問題点を踏まえ、5S-カイゼンの促進のためのミーティングに参加する青年海外協力隊の小林さん(右から2人目)

From Costa Rica

マルビン・ヘレラ 氏

国立工科大学
品質生産センター(UIN-CEFOF)
コンサルタント



カ イゼンに出会ったのは1994年のこと。日本企業のカイゼン活動のビデオを見たのですが、正直なところ、コスタリカで実現するのは難しいのではと感じました。JICA専門家の指導の下、モデル企業で試験的に導入した時も、自分の仕事以外のことに取り組み習慣がなく、なかなか受け入れられず苦労したのを覚えています。でも私自身、JICAの研修で日本企業を視察して考えが変わりました。何となくでもコスタリカに浸透させたいという思いが強まったのです。

当初の苦労はありましたが、やはり百聞は一見にしかず。コスタリカの企業人も、「整理・整頓の日」や5Sの取り組みを議論する場を設けるなど、小さな積み重ねから生まれる効果を肌で実感することにより、少しずつ、自主的にカイゼン活動に取り組むようになっていきました。

現在はUIN-CEFOFを拠点に、中米各国の中小企業支援機関とネットワークを形成し、域内の生産性向上に取り組んでいます。私たちが長年にわたって習得したノウハウは他国でも応用できるはず。そう信じています。



中米カリブ地域

「中小企業の品質・生産性向上に係るファシリテーター能力向上プロジェクト」 (2009年～)

コスタリカの中米域内産業技術育成センターと協働で、域内のネットワークを形成・活用し、品質・生産性向上のための人材育成を支援。第三国研修やセミナーなどを実施する。
(⇒左コラム参照)

ハンガリー

「生産性向上プロジェクト」 (1995～99年)

市場経済への移行に伴って設立されたハンガリー生産性センターの能力強化を支援。企業診断などに必要なノウハウを指導、国内の生産性運動をリードする人材が多く育成された。

ブラジル

「生産性・品質向上」 (1995～2000年)

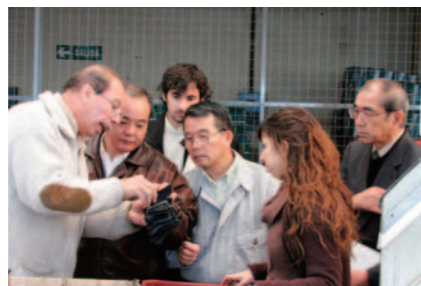
生産性向上の概念と技術を普及するため、経済活動が活発な南部の品質・生産性機構パラナ州支局の能力強化を支援。セミナーの組織的運営、コンサルティングサービスの実施体制を確立した。



アルゼンチン

「中小企業活性化支援計画」 (2004～06年)

中小企業の競争力強化を目的に開発調査を実施。中小企業を取り巻く現状把握、モデル企業へのカイゼン活動の導入を通じて、経営・生産管理技術の普及体制に対する提言を行った。



エジプト

「生産性・品質向上センタープロジェクト」 (2007年～)

産業界の競争力向上を目指し、生産性・品質向上センター(通称:カイゼンセンター)を設立。生産性・品質管理分野のコンサルティング、研修やワークショップの自立的実施を支援。



モルドバ

「企業生産性向上プロジェクト」 (2005～06年)

モデル企業で生産性向上を達成するため、コンサルタントと企業が協働で行うカイゼン活動を推進。その成果を他の企業と共有することで、国内全体で生産性向上を図った。



タイ

「生産性向上プロジェクト」 (1994～2001年)

中小企業の実産性を改善するため、タイ生産性本部と協働で企業へのカイゼン活動の導入を支援。多くの企業で新たな生産管理の手法が採用され、生産性活動が広く普及した。



世界に広がる カイゼン MAP

JICAの支援により、世界各地に広まりつつある日本式の「カイゼン活動」。その一部を紹介。

日本

「シリア総合経営管理」コース (2006年～)

シリアの企業経営幹部や企業支援業務を担う工業会議所の職員を対象にした研修。日本企業の視察を通じ、実践的な経営管理、品質・生産管理、生産性向上について理解を深める。

カンボジア

「生産性向上に重点を置いたパイロット中小企業支援プロジェクト」 (2010年～)

世界金融危機により打撃を受けた中小企業のパフォーマンス改善に貢献すべく、企業診断やセミナー開催などを通じて得られた知見を基に、政策レベルでの中小企業支援戦略を策定する。



エチオピア

「品質・生産性向上計画調査」 (2009年～)

メレス首相のリーダーシップで産業省に設置された「カイゼン・ユニット」と協働で、企業のカイゼン活動を通じた品質・生産性向上を図る。モデル企業の診断を通じて、生産性向上の全国展開に必要な取り組みを提言する。



シンガポール

「生産性向上プロジェクト」 (1983～90年)

JICA初のカイゼン支援事例。シンガポール国家生産性庁(現在の企画・生産性・革新庁)に、企業診断や品質管理のノウハウを伝授。200社以上でカイゼン指導を実施、約200人が日本での研修に参加した。
(⇒左コラム参照)



From Singapore

ラム・チュン・シー 氏

ホウシンコンサルティング
代表取締役社長



今 から25年前、偶然手に取った新聞で「国家生産性庁、日本に派遣するコンサルタントを募集」という記事を目にしました。日本で生産性向上のノウハウが学べる。高度経済成長期の日本企業の躍進に興味を持っていた私は、当時勤めていた会社を退職。3か月半、日本でJICAの研修に参加しました。

日本で初めてカイゼンの現場を見た時の印象は、「ショック」の一言に尽きます。どこに行っても経営陣の熱意は相当なもので、社員の自主性を尊重している点に感銘を受けました。シンガポールも負けてはいられない。そんな思いでJICA専門家と協働で、中小企業に対して社員提案型の5Sの取り組みを指導してきました。

現在はコンサルティング会社を立ち上げ、東南アジア諸国連合(ASEAN)域内の中小企業の実産性向上に取り組んでいます。少しずつ5Sを理念に掲げる企業も増えてきましたが、現場レベルで見るとまだ十分なものではない。私が日本から学んだ知識を還元すべく、これからもカイゼンの普及に努めていきたいと思っています。

**40年の企業経験を
途上国で生かしたい**

赤、青、黄、緑……。色鮮やかなプラスチックのブロックを囲み、数人の大人たちが熱心に議論している。「これは右に置いた方がいいんじゃないか」

「いや、そうすると、こっちが取り出せなくなる」
「じゃあ、すぐ使わないから奥にしまっておこう」

世界的に子どものおもちゃとして人気の「LEGO」。それを大きな男性が、右へ左へと動かしている光景は何とも不思議だ。

「この倉庫を効率的に機能させるために、あと何を整理すればいいんだろうか」

そう語り掛けるのは、シニア海外ボランティアの家木幸一さん。派遣先は、ヨルダン大学の中に国家プログラムの一環で設置された、産業界の人材育成機関FFF。生産管理マネジメントを指導している彼は、FFFスタッフの能力強化に加え、現地企業の生産性向上を目指し、カイゼンの巡回指導、企業診断セミナーの開催など精力的に活動している。

家木さんは日本有数の総合電機系メーカーの出身。約40年にわたり、技術職からマネジメントまで幅広い業務を経験した。定年退職後も、自分の経験・

知識を生かせる場を探していたが、日本国内では「なかなか活動の場が見つからなかった」という。そこで出会ったのがJICAのシニア海外ボランティア。「会社の先輩から途上国で社会貢献ができる道があることを聞いて、第2の人生のステージとして挑戦してみよう」と思いました。

近年、経済発展が急速に進むヨルダンでは、特に中小企業の人材育成、生産性向上が重要な課題となっている。そこで期待されているのが、日本の高度経済成長を支えてきた「カイゼン活動」の導入。「カイゼン」や「5S」という日本語が通じるほど、理論は理解されています。でも大学を卒業してゲンバを知らずに管理職になるケースが多く、なかなか実践につながっていないのです。

カイゼンがすべての企業活動のベイスになるのは周知の事実。しかしこの国では、日本企業では当たり前のことが一筋縄にはいかない。「日本では上司と部下、そして仲間同士が協力し合っていて、5Sを実践する習慣が根付いています。しかしヨルダンの人たちは個人の主張が先行してしまい、集団で何かをすることが得意ではないようです」。カイゼン活動は、社員が一丸となって行うもの。どのようにすれば、それを彼らに理解してもらえるだろうか。「誰でも」が「ここ」がダメ。あそこが汚れている。などと、他人から指摘される

シニア海外ボランティア
IEKI Koichi

家木 幸一 さん

ヨルダン南部の港湾都市アカバの職業訓練センターで、レゴブロックを使った5Sトレーニングを指導する家木さん



のは面白くありません。日本の方法を押し付けるだけではダメ。彼らのプライドを傷つけず、自主性を引き出せる方法を模索していました。

**レゴブロックを使った
5Sトレーニング**

試行錯誤の末、家木さんが考案したのが「レゴブロックを使った5Sトレーニング」。おもちゃのレゴを仮想の倉庫に見立て、在庫の配列や不用品の仕分け、運搬方法などの効率化をブロックを動かしながら考えるというものだ。「仕事場から離れた環境で、和やかな雰囲気での5Sの基本を身に付けることができる。さらにグループワークを通して、カイゼン活動に必要な不可欠な「仲間意識」をはぐくむことも狙いでした」。さらに家木さんは、レゴトレーニングで習得した5Sの知識を実践に結び付けるために「5S自己採点評価法」を取り入れた。「5S関連で改善しよう

とする項目を5〜10個決めて、項目ごとに5段階の採点表を作るんです。そしてそれぞれの職場で、この期間でここまで改善するといった計画を立て、定期的に状況を自己評価してもらいました」。5Sは人が決めたり指摘されたりするものではない。社員一人一人が主役となり、地道に努力していかねればならない。これは、家木さんが日本企業で体感したこと。まさに「ゲンバ」から生まれたアイデアだ。

最初のころは、どんなにカイゼンの効果について説明しても「メイトを雇っているから、タバコの吸殻を捨ててもいい」という人もいた。しかし今では「会社で新しく5Sを始めたとか、週末に近所の人を集めて掃除をするようになったとか。一つ一つの変化がうれしいですね。家木さんの指導の下で始めた5Sを実践し続けた企業が、ヨルダンの優良企業としても表彰されている。

「若いころから積み上げてきた技術や知識が、異国の地で役立てられるなんて思ってもみなかった」という家木さん。「自分の提案が受け入れられた時の喜びは、日本では体験できませんね」と笑う。休みの日には、趣味の絵を子どもたちに教えるなど、現地の生活で得た人とのつながりはかけがえのない宝物だ。

「現地の人と心を通わせ、共に考え、同じ目線で仕事に取り組み。そうしているうちに、若いころの活力がよみがえる気がするんです」

家木さんにとっても、ヨルダンでの活動は、自身の仕事人生の「カイゼン」につながっているのかもしれない。



いえき・こういち
1940年旧満州生まれ。総合電機系メーカーを定年退職後、JICAシニア海外ボランティアに参加。ヨルダン(2003年10月~05年10月、2010年1月~現在)とエジプト(07年11月~08年2月、08年10~12月)に派遣。民間企業のTQM(総合的品質管理)推進に携わる。



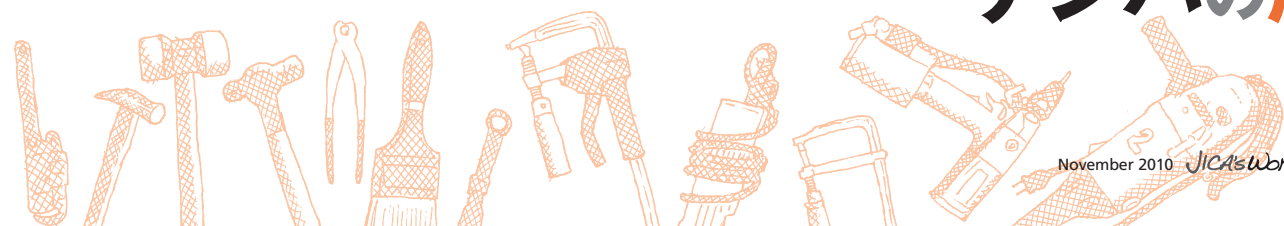
「5S自己採点評価法」を採用した肥料会社の視察。職種柄、ほこりが出やすい職場がきれいに清掃されていた

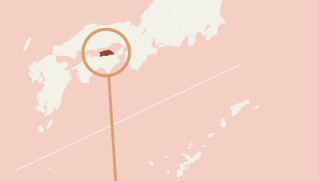
「仲間意識をはぐくみ生産性向上を広めたい」

長年、まさに日本企業のゲンバで「カイゼン」を実践してきたシニア海外ボランティアの家木幸一さん。その経験や知識を生かし、現在、中東のヨルダンでユニークな手法を取り入れたカイゼン活動に取り組んでいる。

第20回

ゲンバの風





香川県

面積1,876.52平方キロ、人口約100万人。瀬戸内海国立公園の中心、四国の北東部に位置する全国で最も小さな県。古くから水不足に悩まされたことから、県内に1万4,000カ所以上のため池があり、限られた水の有効活用による農業が実践されてきた。瀬戸内海には小豆島など多くの島々が点在し、2010年7～10月、7つの島と高松市を舞台に「瀬戸内国際芸術祭2010」が開催された。

知識・経験・人材をフル活用して

まるでおわんを逆さまにしたような形の小さな山々の間に点在する、数多くのため池。雨や河川に恵まれず、ため池を使った節水農業を古くから実践する香川を象徴する景観だ。8月、この香川の原風景を舞台に、ため池を利用した水管理について学ぼうと、アフリカやアジアのJICA研修員たちがこの地を訪問した。「ため池は、安定した水の確保や効率的な水の管理に大きな役割を果たしており、地域の農業を支えているんです」。県の土地改良課や「水土里ネット香川※」など水資源管理を担当する職員の説明に、研修員たちは終始、熱心に耳を傾けていた。

「農家が協力し、苦勞して地域で水を分け合ってきた香川の経験を、同様に水不足に悩む国や地域のために少しでも役立ててほしい」。そう話すのは、香川県総務部国際課の六車桂さん。「多くの関係者の協力で実りある研修になった」と喜ぶ。

「国際交流」「外国人住民への支援」と並ぶ国際事業3本柱の一つとして、「国際協力」の積極的な推進に努める香川県。県が持つさまざまな分野の知識や技術、ノウハウを生かし、研修員の受け入れや草の根技術協力事業などでJICAと連携し、精力的に香川発の国際協力に取り組んでいる。中でも特徴的なのが、02年から続け

“香川らしい国際協力”で人づくりを

医療や農業、行政など、県内のさまざまな経験・知識・人材を生かし、国際協力で積極的に取り組む香川県。真心を込めた香川発の支援が、開発途上国の人づくりに貢献している。

香川県



2010年8月、JICAの研修「農家組織によるため池を利用した地域の水管理」で、県内のため池を訪れたアフリカやアジアの研修員

“香川らしい国際協力”で人づくりを



香川県の救急医療の現場を視察するカンボジア人医師。救急車にも同乗し、現場に立ち会った

て実施しているJICA草の根技術協力事業だ。「香川らしい国際協力プロジェクト」と名付けられたこの取り組みでは、ラオスやカンボジア、ベトナムなどこれまで5カ国を対象に、畜産・農業、水産、環境、行政改革、医療などさまざまな分野で支援を展開。豊富な知識と経験を持つ県内の専門家を現地に派遣するとともに、各国の研修員を香川に招き、研修を行ってきた。

香川の真心を写す写真展

「この設備では、軽度の骨折の処置程度しか対応できないのでは」。県が08年からカンボジアで実施している「医療人材育成プログラム」で、県立中央病院救命救急センター部長の佐々木和浩さんと看護師の宮川公伸さんが、初めて首都プノンペン市内の病院の手術室を訪れた時の言葉だ。話には聞いていても、施設も医療器具も満足にそろわない現状をいざ目の当たりにすると、「普段、最新の医療器具による高度な救急医療が当たり前の環境にある自分たちに、一体何ができるのか」と考え込んだという。

だがそこで心に浮かんだのは、モノのなかった時代から、人々の情熱と勤勉性で今を築き上げてきた日本の経験だった。「自分たちにできることは、意志と熱意を持った医療人材を一人でも多く育てること」。現地の医師や看護師のために、基本的な救急医療や応急処置に関するワークショップを開催

し、終了した後も救急医療はどうあるべきか、彼らと熱い議論を交わした。そこでは、勤務態度や医療従事者としての責任など、厳しいこともあえて伝えてきた。そして現地では、日本で学んだことを生かし、救急医療の知識や技術の向上を促進するための推進委員会の設立準備が始められるなど、支援の成果が芽生えつつある。

「ベトナム・ハイフォン市一般行政人材育成プログラム」では、07～09年に行政官18人を香川県に招いて研修を実施。六車さんは「体制が異なる国の行政担当者が香川から学べることにあるのか、当初は不安だった」と話す。実際には、公務員としての理想像などを考えを同じくする点も多かったという。中でも研修員が感心したのは、講義の時間を超えても熱心に質問に答えたり、急な要求でも資料をかき集めてくれるなど、手を抜かず、自分たちのために可能な限り協力しようとする県職員の姿勢だった。「ベトナムでも、香川県のような公務員を育ててくることが伝わったことが実感でき、うれしかったですね」。

こうした取り組みを県民に広く知ってもらおうと、JICAと香川県が毎年初春、県庁舎で行っている恒例のイベントがある。途上国で活躍する県の専門家や香川出身のJICAボランティアの雄姿、香川を訪れる研修員たちの真剣な様子などを鮮やかな写真で紹介



2010年からはバラグアイで、農産物の活用に関する支援を開始。9月には県の農業分野の職員が現地調査や研修を行った

2006～08年にカンボジアで実施した環境技術支援では、現地で大気汚染の調査手法などを伝えるワークショップを開催



介する、「国際協力写真展」だ。

「多くの来庁者が足を止め、香川らしい国際協力を通じて何かを学ぶ途上国の人々の姿に見入っています」と六車さん。「限られた人員、時間で、香川県にできる国際協力は何かと悩むこともあります。しかし、その中でも相手を思い、最大限のお手伝いをするところこそが私たちの国際協力の形。どんな新たな成果が写真に残されているか、来年の展示が今から楽しみです」。その言葉に、香川県の国際協力に込められた「真心」を感じた。

KTCの個性豊かな授業

「コンコンコン...」
真つ赤な赤い玉が、くるくると宙を舞う。簡単そうに見えるが、いざやってみるとなかなかうまくいかない。

夏の暑さがようやく和らぎ始めた9月下旬、名古屋市内の公民館にたくさんの人々が集まっている。おじいちゃんから子どもまで、皆が一樣に手にしているのは、けん玉。一昔前はおもちゃ箱の中の定番だったが、今ではほとんど見られなくなった。そんな古き良き日本の遊び道具に挑戦しながら、「意外と難しいんだなあ」。そんな声が飛び交う。

「膝のバネを利用するのがコツです！」



地元のショッピングモールのイベントで、KTCけん玉基金のブースを出展。来場者に活動について説明するも生徒の役割だ

そう言うって、鮮やかなけん玉さばきを見せるのは、KTC中央高等学院（以下、KTC）名古屋キャンパスの生徒たち。赤い玉がポンッと軽やかに木の皿に乗ると、わあっと歓声が起こった。彼らは月に数回、地元の小中学校や保育園、児童館や公民館などを訪問し、地域の人たちにけん玉を教えている。ここでは大人も子どもも関係ない、世代を超えてみんなが一つのことに夢中になり、つながれる空間なのだ。

でもなぜ、けん玉、だったのか。KTCは通信制高校「屋久島おおぞら高等学校」の生徒を卒業するまでサポートする民間の教育機関。普通校で人間関係がうまくいかなかったり、不登校を経験して転校してきた子どもたちも多い。自分のペースで各地域のキャンパスに通いながら、自由なスタイルで学べるのが特徴だ。さらにユニークなのが、トライアルレッスンと称された選択制の授業。ダンスや歌、手話やヨガなど、普通科目以外のさまざま



地域の子どもにけん玉を指導する1年生の寺田勇司くん(右)。「練習しすぎて筋肉痛なんです」と話してくれた

けん玉で世界の未来を描こう

けん玉の日本記録保持者でもある、KTC中央高等学院の窪田保先生。生徒たちと共に「KTCけん玉基金」を立ち上げ、けん玉を通じて、日本国内の地域交流、モザンビークの学校建設に取り組んでいる。



窪田先生愛用のけん玉

な分野についてプロから学べる。その一つが、けん玉。だった。

けん玉を指導するのは、理科担当の窪田保先生。けん玉先生の異名を持つ彼は、なんと、けん玉の日本記録保持者。大学生時代に大記録を樹立し、卒業後は青年海外協力隊としてモザンビークに赴任。現地の子どもたちに理科を教える傍ら、「日本の遊びを広めたい」と週末などを活用してけん玉教室を開いていた。

「帰国後もしばらくはけん玉で食べていきたいと思っていた」という窪田先生。しかし、モザンビークでの教え子がけん玉の世界大会で優勝し、自分の進路を改めて考え直した。これ以上うれしいことがあるだろうか。そう考えた時、けん玉。に対して一つの満足感を得た自分に気付いた。そして、人の成長にもっと深く携わりたいと強く思い始めたのだ。

そんな時に出会ったのがKTC。そこが彼の新たな人生のステージとなった。

けん玉を通じて遊びと学びをつなぐ

「日本には、遊びの文化が消えつつある。大人が子どもに遊びを教えることも少ない。けん玉を通じて、人と人とのつながりを学んでほしいかった」。そんな思いから、窪田先生はKTCのトライアルレッスンでもけん玉を取り入



協力隊員時代、モザンビークの子どもたちにけん玉を教える窪田先生

れた。最初は「なぜけん玉？」と思っていた生徒たちも、窪田先生の巧みな技を目の当たりにし「もっと上手になりたい！」と、どんどんのめり込んでいった。

そんなけん玉先生のうわさを聞き、あちこちから「出張授業してほしい」という依頼が来るように。休日でも「呼ばれればどこでも」赴く。もちろん、窪田先生のけん玉仲間、である生徒たちも一緒だ。「人と話すのが苦手だった」という子も、けん玉をしながらいるんな世代の人と話すことで、「けん玉を教えるのが楽しい」と積極的に参加するようになった。

そして2008年10月、窪田さんは生徒たちと共に「KTCけん玉基金」を立ち上げた。目的はモザンビークに学校を建設すること。「協力隊員時代にお世話になったモザンビークに恩返しをしたい」。心の底ですつとそう思っていた。活動資金は、出張授業で販売し

窪田先生(中央)の右腕となる、KTCけん玉基金の主力メンバー。「けん玉が好きなんです」という卒業生の松井みさん(左)も、ボランティアとして参加を続けている



たけん玉の収益と寄付金。「日本には、遊びが広まり、モザンビークには、学びの場が建つ。けん玉を通じて、両国の人たちが幸せになればと思っています」。窪田先生は「国際協力しよう！」とは言わない。しかし先生の思いを、生徒たちは確実に感じ取っている。「小さい時から青年海外協力隊にあこがれていた」という鳥居史高くん(3年生)は、「高校で友達とうまくいかなくて、いつの間にかそんなことも忘れていたんです。でもKTCで窪田先生とけん玉に出会って、自分の夢を思い出しました」。現在、日本語教師を目指して受験勉強に励んでいる。

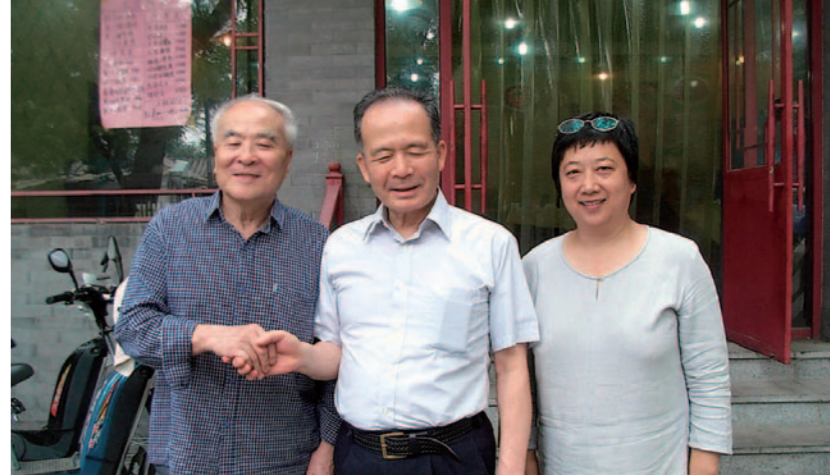
「KTCけん玉基金」を立ち上げて2年。これまで販売したけん玉の数は約2500個、寄付金を含め約150万円が集まった。モザンビークに学校を建設するまで、まだ少し時間がかかりそうだが、活動を支える生徒たちは次々に育っている。

「生徒たちは純粋にけん玉や地域の人との交流を楽しんでいます。それがモザンビークの小学校建設に自然につながっていくば」

けん玉に夢を乗せて、KTCを拠点に、日本とモザンビークはつながっている。



駐日モザンビーク大使がKTCを訪問。モザンビークの歴史や生活環境について話を聞いた



鄭代表(右)と田中理事長(中央)。「中国では視覚障がい者への偏見が残り、福祉制度も整っていない。そんな環境の中でも活動を続ける紅丹丹を今後も支えていきたい」と田中さん

音声図書でより幅広い情報を

人間が得る情報の約9割が「目」からだといわれる。生まれつき目が見えない人、事故や病気で視力を失った人…。彼らは、ごく当たり前の生活すら難しい上、読書やテレビ、映画などの娯楽の機会も限られてしまう。

こうした視覚障がい者の生活に不可欠なのが点字だ。また、「音声図書」と呼ばれる、本や雑誌の文字・図などの情報を音声化した「録音図書」、テレビや映画など主音声だけでは伝わりづらい人物の動きや情景を副音声で説明する「音声解説」は、視覚障がい者の「目

となり、点字よりも幅広い情報を彼らに伝えている。

この音声図書を2万タイトル以上所蔵し、その製作や貸し出しを通じて、視覚障がい者の人たちをサポートしているのが、東京都高田馬場にある社会福祉法人日本点字図書館だ。1940年の設立以来、70年にわたって視覚障がい者福祉の向上に努め、近年は音声図書をさらに普及すべく「デジタル録音図書」の製作に力を入れる。カセットテー



日本点字図書館で、図書貸し出しサービスの利用者管理方法について説明を受ける紅丹丹のスタッフ。この図書館を含む全国の点字図書館では、来館者への貸し出しのみならず、全国の利用者への郵送サービスも無料で行っている



国際協力の担い手たち

社会福祉法人 日本点字図書館

当たり前の毎日を視覚障がい者に

日本点字図書館は、5万タイトルに上る点字・音声図書を所蔵する、国内最大の視覚障がい者向け施設。70年にわたり培ってきた視覚障がい者福祉のノウハウを生かし、中国・北京市で音声を使ったサービスの普及に取り組む人々を支えている。



タイマーに音声をつけるなどの工夫が凝らされている視覚障がい者用に開発された調理器具など。日本点字図書館で販売されている



紅丹丹の編集ルームで録音図書の編集技術を学ぶスタッフたち。「次はどうしたらいい?」と日本点字図書館のスタッフ(中央右奥)に次々と質問する

た田中さん。それゆえに、目の見えないうことの不自由さを痛感してきたと同時に、本や雑誌を読めることへの喜び、音声図書のありがたさを誰よりも知っていたのだ。

立ち上がった言葉の壁

プロジェクト開始から1年余り。これまで日本点字図書館のスタッフたちは2度北京の紅丹丹を訪れ、録音図書や副音声入りの映画、ラジオ番組などの製作技術を指導してきた。「日本人スタッフから学んだことを生かして、『録音ボランティア』の養成講座を開いたり、『デジタル録音図書』の製作にも着手し始めました」と紅丹丹の張新莉さんはうれしそうに話す。

しかし、「言葉の壁」に悩むこともあった。中国語が分からない日本点字図書館のスタッフたちは、「録音図書に声を吹き込む『録音ボランティア』の育成で、視覚障がい者の人たちに聞きやすくするためにどう抑揚を付けて中国語の原稿を読めばいいのか、うまく伝えられないこともあった」と言う。また、映画の副音声の原稿作成では言葉の選び方に食い違いも生じた。それでも、より多くのことを吸収しようとする積極的な質問を繰り返す紅丹丹のスタッフたちの情熱に押され、互いが理解し合えるまで幾度となく話し合った。「私たちの使命は視覚障がい者のサポート。この思いに国境はありません」と日本点



紅丹丹にある録音ブース。録音ボランティアがガラスの向こうで読み上げる声や音質を調整する

字図書館の島田延明さんは話す。「ここは発見の宝庫です!」今年9月、日本点字図書館での「現場」をじかに見るために来日した紅丹丹の孫志鵬さんは満足そうな様子だ。彼らは、録音・編集ルームを視察したほか、音声図書の管理方法や点字教室のカリキュラムなどについて学んだ。また、点字・音声機能などを備えた文房具や調理用具、スポーツ用品といった「視覚障がい者用に開発されたグッズ」の存在を初めて知る。「一番の収穫は、『当事者の立場になって考えること』に気付けた点です。こうした彼らの目線に立つて作られたグッズを中国にも広めていきたい」と孫さんは目を輝かせる。「いずれは、パソコンなどのカルチャー教室の運営や合唱・演劇会などを開催する『総合的な視覚障がい者のための文化センター』へ成長できるよう、支えていければ」と話す田中さん。その第一歩となる「音声図書」の充実が今、紅丹丹で着実に進められている。

Q「北京紅丹丹教育文化交流センター」

そしてもう一つ、日本点字図書館が力を入れるのがアジア諸国に対する支援。主に、視覚障がい者の文化・福祉の向上に貢献できる人材の育成だ。現在取り組んでいるのは、視覚障がい者を対象にメディア製作やバリアフリー施設の情報を提供している中国のNGO

(以下、紅丹丹)への協力。2009年6月にJICAの草の根技術協力事業を通じて「視覚障害者音声情報提供技術指導事業」を開始し、中国の視覚障がい者たちがより多くの情報にアクセスできる環境づくりを行っている。きっかけは08年、中国で開かれた「日中NGOシンポジウム」に日本点字図書館の田中徹二理事長が出席し、紅丹丹の鄭曉潔代表と出会ったことだった。「中国には1200万人もの視覚障がい者がいるそうですが、点字はある程度普及している一方で、音声図書については利用されるどころか、存在を知らぬ人すら少ないことを知りました。ならば、『日本に学びたい』という鄭さんたちの思いに応えたいと思って」大学1年生の時、病気で光を奪われ



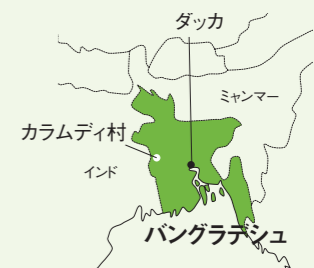
ココロとココロ

～届け 私たちの思い～

NPO法人
バングラデシュと
手をつなぐ会

村のより良い地域医療のために

インド国境近くのカラムディ村に、地域医療のサポートに汗を流す7人の若者がいる。彼女らは、現地NGO「シヨングダニ・シヨングスタ」による研修を受けた女性たち。その活動をNPO法人「バングラデシュと手をつなぐ会」が支援している。



NPO法人バングラデシュと手をつなぐ会
〒814-0002 福岡市早良区西新5-4-20
TEL/FAX : 092-844-1369
Email : bangla@nngo.jp
URL : http://bangla.nngo.jp/

地域医療を支える女性たち

バングラデシュの首都ダッカから車で約6時間。インドの国境近くにあるカラムディ村に、この地域でただ一つの母子保健センター(MCH)がある。妊産婦の検診や出産を目的に1995年に設立された施設だ。しかし、村にはほかに医療機関がないため、ここで働く医師はどんな病気でも診なければならぬ。日に50～60人の外来患者を診察し、月に30～40の出産を引き受ける。

さらに、遠くて病院まで来られない人々のために、カラムディ村外12カ所に設置されたサテライトクリニックを回診。各家庭への巡回検診も実施する。現在、2人の医師と21人のスタッフで、この村とその近郊に暮らす約5万人の健康を守っている。シヨングダニ病院とも呼ばれるMCHの運営は、現地NGOの「シヨングダニ・シヨングスタ」が担い、その活動を



サテライトクリニックで、母親を対象に健康・衛生教育を行うソーシャルワーカー

や母子の相談に乗り、ヘルスコordinatorは村にどのような医療が必要とされているのかを調査し、MCHに伝えて適切な対策をとる。医療関係者と地域住民との調整役だ。

しかしこうした活動をしながら、彼女たちは「限界」を感じていた。それまで、保健医療に関する正式な教育を受けたことがなかったからだ。

顔が見える関係をつくらう

村にとって貴重な人材である彼女たちに、必要な専門知識と技術を学んでもらうことこそ、真の地域医療を実現するために欠かせない。そう考えたラフマンさんたちは、ソーシャルワーカーとヘルスコordinatorを対象に、3～4カ月の研修を企画。研修費の一部にJICA

A基金が充てられた。

「シヨングダニ・シヨングスタはダッカにある研修機関との打ち合わせや研修費用などの事務手続き、研修後の体制などを担当し、私たちは研修費の申請や決算報告の監査などを行いました」。研修プログラムは、妊産婦検診や乳幼児の扱い方といった基礎的なことから、患者への対応や生活向上を目的としたプロジェクトの進め方など多岐にわたる。

中でもユニークだったのは、研修生の1日を「農作業」から始めたことだった。

「バングラデシュの女性たちは農作業をしないのが普通です。でも、村人たちの暮らしを、体で理解できるように毎日農場に出てもらったのです。彼らの生活を知ること、より良い地域医療につながります」。

研修は、「故郷のために貢献したい」という彼女たちの意欲を大いに触発した。

従来にも増して自ら積極的に村に出向き、村人たちと心から話し合うようになった。バングラデシュの農村の多くは、医療従事者としての資格を持たず、保健医療の知識も少ない。はだしの医者と呼ばれる村人が医療を担わざるを得ないのが現状。そうした中で、研修を受けた彼女



無事に生まれた孫を抱きかかえ、安堵の表情の祖母



MCHの病棟で現地の医師にアドバイスをし、手をつなぐ会のニノ坂保喜代表。普段は福岡市内でクリニックを開いているが、定期的にバングラデシュを訪れている



(左)家庭への巡回検診の際、井戸水の使い方などを妊婦に指導
(右)サテライトクリニックで一般患者の脈拍や血圧を計測

たちに寄せられる期待は大きい。

「私たちは20年以上の活動を通して、多くのことを学んできました。それは、人と人とのつながりや、顔の見える関係の大切さです。村人が私たちに心を開いて話ができること、一緒に喜んだり悲しんだりできること、そういう環境をつくること、手をつなぐの本当の意味だと考えています」

シヨングダニ・シヨングスタには今、地域医療を支える「看護学校」や「医療補助者の養成校」を建設する計画があり、土地の購入を終えて手続きを進めているところだ。手をつなぐ会も資金調達や技術指導などのサポートを検討している。2012年のオープンを目指して、手をつなぐ会の手は今まで以上に固いきずなで結ばれている。

あなたの小さな一歩から始まる国際協力 世界の人びとのためのJICA基金

JICAでは、国際協力に関心のある日本の皆さまからの寄付を、開発途上国の貧困削減や環境保全への取り組みに活用する「世界の人びとのためのJICA基金」で受け付けています。皆さまのご支援をお待ちしております。

寄付金の使われ方

お寄せいただいた寄付金は、途上国の貧困削減、医療や教育の提供、環境問題の解決などに取り組むNGOの活動に充てられます。各支援活動や寄付金事業収支についてのご報告は、「JICA寄付サイト」で公表します。

寄付の方法

「JICA寄付サイト」からお申し込み下さい。クレジットカードによる決済や、銀行・郵便振込みなどがお使いいただけます。
JICA寄付サイトURL : <http://www.kifu.jica.go.jp/>

「カイゼン」を通じて途上国の中小企業振興などを担当する、JICA産業開発部の筱窓香さん。それぞれの国・現場に適した「カイゼン」が広まるよう、心掛けている。

「カイゼン」を通じて途上国の中小企業振興などを担当する、JICA産業開発部の筱窓香さん。それぞれの国・現場に適した「カイゼン」が広まるよう、心掛けている。



JICA九州で研修に同行する篠さん(左)。効率的な生産を目指し、さまざまな工夫を取れ入れている企業を視察

日本の中小企業政策・地場産業振興について学ぶために来日した研修員と

「国

実際のな舞台上で活躍してみたい。漠然とそう思い描いていた学生時代、交換留学で1年間学んだイギリスの大学で開発経済学に出会い、南北問題や開発援助に関心を持つようになりました。また、母国のNGOで働いていたベトナム人のルームメイトがJICAの活動についてよく知っていたので、話を聞く中で「いつか自分もJICAで国際協力に携われたら」と考えるようになりました。

民間企業で3年間経験を積んだ後、JICAに転職し、JICA九州で国内研修業務を担当することになりました。そこで私が最も興味をひかれたのが、途上国の中小企業振興や生産性向上などを目的とする研修です。「カイゼン」や「5S」を導入し、優れた業績を上げている九州の企業の視察に担当者として同行し、小さな工夫を数多く取り入れながら、生産性や職場環境の向上に励む日本企業に感銘を受ける研修員の様子を、何度も目の当たりにしてきました。もちろん、私にとってもそれは同じ。思わず研修員と一緒に、必死にメモを取っていたこともありました(笑)。

研修員たちの多くは、JICAが各国で実施しているプロジェクトの関係者で、中小企業や地域産業の振興を担当

する行政官などが中心でした。そのためいつからか、「帰国した彼らが、日本での経験をどのように生かしているのか、その成果を確かめてみたい」という思いが生まれてきました。2年間の国内研修業務を経て、自ら志望して今の部署に異動したのには、そんな理由があったんです。

現在は、メキシコやチリ、セルビア、コロンビアなどで実施している中小企業振興支援を主に担当しています。これらの国では最近、中小企業の経営全般や、品質・生産性向上に関するコンサルティングへのニーズが高まっており、「中小企業の経営を指導できる人材を育成したい」という声が大きくなっています。そこで、「カイゼン」に精通するコンサルタントやアドバイザーを育成したり、そのための制度を構築する支援を開始しました。その中で私は、現地事務所や長期専門家、中小企業振興を担当する相手国の関係機関と連絡を取り合いながら、プロジェクトの進捗管理や目標達成状況の確認、運営上のさまざまな問題の解決に努めています。

「カイゼン」は、高価な機材や設備を導入しなくても、身の丈に合ったことから始められるため、途上国のさまざまな製造現場などで効果を発揮するはず

です。とはいえ、日本で実践されている内容を文化や国民性の違う国にそのまま持ち込んでも、必ずや成功するとは限りません。例えば従業員数のやる気やモチベーションを高める方法一つとっても、合う合わないがあるはず。最終的に、現地のコンサルタントやアドバイザー、関係機関の人々が、日本ではぐくまれてきた理念をよく理解し、あくまで自分たちに合った進め方、方法で取り入れていくことが大切です。「カイゼン」の高い自立発展性を促すため、プロジェクトを進める上で私が常に忘れないようにしている視点です。

うれしいのは、現地に出張した際に研修員に再会し、日本で学んだことを生かして「カイゼン伝道師」として活躍している様子を目にしたとき。「研修での気付き」から「実践」という、プロジェクトの成果の一つを見た喜びと、この仕事のやりがいや面白さを実感する瞬間



JICA産業開発部
産業・貿易課
筱 窓香
SHINO Madoka

大学卒業後、民間企業に3年間勤務した後、2008年1月JICAに就職。JICA九州・研修業務課を経て、2010年4月より現職。



グアテマラの地場産業振興について現地の経済省と共催したセミナーに出席(右)



JICAブースは終日、国際協力に関心のある人でにぎわった

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」の著名人メンバーでもある医師の桑山紀彦さんが「地球のステージ なんとかしなきゃ!版」を開催。桑山さんが制作したプロジェクトのテーマソング「世界の片隅からくなく

なんとかしなきゃ!」が初披露されました。また、プロジェクトのブースでは、趣旨に賛同し新たにサポート登録をする人の姿も多く見られました。

「グローバルフェスタ JAPAN 2010」開催

01

10月2・3日、東京・日比谷公園で「グローバルフェスタ JAPAN 2010」(外務省、JICA、国際協力NGOセンター共催)が開かれました。今年で20回目を迎える国内最大級の国際協力の祭典に、2日間で史上最多の10万5000人が来場。「MDGS、それは私たちの約束」をテーマに、国際協力を携わる団体や企業などがさまざまな企画を行いました。

JICAもイベントステージやブースを通じて参加。ミレニアム開発目標(MDGS)関連の活動紹介やJICAボランテアなどのキャリア相談、JICA研修員や青年海外協力隊OBのトークショーなど多彩なプログラムを提供し、多くの来場者が関心を寄せていました。

2日目のフィナーレには、メインステージで「なんとかしなきゃ!プロジェクト」の著名人メンバーでもある医師の桑山紀彦さんが「地球のステージ なんとかしなきゃ!版」を開催。桑山さんが制作したプロジェクトのテーマソング「世界の片隅からくなく

世界が一丸となり国際協力について考える

02

9月20・22日、ニューヨークで「ミレニアム開発目標(MDGS)国連首脳会合」が開催されました。約140カ国の代表者により、2015年の目標年を前に各目標の達成状況についてレビューが行われ、今後5年間で優先すべき課題の方向性が話し合われました。また小寺清JICA理事が、保健分野の人材育成、アジアのMDGS達成状況をテーマにしたサイドイベントにパネリストとして参加。JICAのこれまでの活動事例を紹介し、「人間の安全保障を理念に、より一層の努力を払っていく」と訴えました。

また10月8日には、ワシントンD.C.で行われた「IMF・世界銀行年次総会」に緒方貞子JICA理事長が出席。2008年の金融危機以降、世界的に続いている不況への対応策に加え、世界経済のけん引役としての新興国への期待などが議論されました。さらに緒方理事長は、会合に出席したロバート・ゼリック世界銀行総裁やラジブ・シャーマン国際開発庁長官と会談。そのほかにも、ドナルド・カベルカ・アフリカ開発銀行総裁とは、南部スーダンやソマリアの情勢について、バキスタンのアブドゥル・ハフィーズ・シェイフ財務大臣とは、今夏の洪水被害への対応などを協議しました。緒方理事長は「今後各国の援助関係者との情報交換を継続的にを行い、連携にも力を入れていきたい」と述べています。

03

国際緊急援助隊 パキスタンに医療チームを派遣

7月下旬から降り続いた大雨の影響により甚大な洪水被害に見舞われたパキスタンに対して、JICAは9月に国際緊急援助隊の医療チームを派遣しました。現地では、インダス川を中心に広範囲でインフラが壊滅。被災者は衛生状況の悪化により安全な水を得ることができず、感染症が拡大していました。

今回、JICAは医療チームを2次にわたって派遣。9月5・22日にかけて、中部のパンジヤブ州ムルタン周辺で医療活動を行いました。診療所には1日200人を超える患者が訪れ、下痢や発熱、マラリアの発症な



診察に来た子どもにマラリアの検査をする隊員

どを訴えました。連日40度を超える酷暑の中で隊員たちは懸命に活動を行い、1、2次隊合わせて延べ3501人を診察。早期復興に向けて、JICAは今後も継ぎ目のない支援を行っていく方針です。

04

「世界の笑顔のために」プログラム 途上国に贈る物品を募集中

「世界の笑顔のために」プログラムは、開発途上国で必要とされている物品(教育、福祉、スポーツ、文化などの分野で使用されるもの)を日本で募集し、JICAボランテアを通じて、世界各地に届けるプログラムです。なお、発送元から指定倉庫(東京都内)までの送料は、物

品提供者のご負担となります。
募集期間：11月30日(火)まで
問：JICA青年海外協力隊事務局「世界の笑顔のために」プログラム係
Eメール：jicaiiv-egao@jica.go.jp
URL：http://www.jica.go.jp/partner/smile/

イチオシ!

M OVIE

『マジでガチなボランティア』

イベントサークル「GRAPHIS」を結成し、合コンやナンパに明け暮れるも、どこか物足りなさを感じていた医大生の石松宏章さん。転機となったのは、「一緒にカンボジアに小学校を建てないか?」という友人からのメールをきっかけにチャリティーイベントを開いたことだった。その後わずか8カ月で小学校が完成。大きな充実感と喜びを感じた彼らは、次なる目標を「医者不足の村への病院開設」と定める。しかし、メンバーとの対立、イベントの赤字、借金など、次々に訪れる試練―。本作は石松さんを中心に、ボランティア活動に青春を捧げる現代の若者の姿を、2007年から3年間にわたり追ったドキュメンタリー。収益の一部はカンボジアに寄付される予定。



©映画製作NGOマジガチ

2010年/日本
監督：里田剛
ナレーション：高良健吾
公開：12月4日(土)より、渋谷シネクイントにてレイトショー(全国順次公開)
URL：majigachi.jp/

☆公開記念イベント「マジでガチにならナイト」
本編の一部上映のほか、里田監督や「GRAPHIS」の現役メンバーなどがカンボジアやボランティア活動についてトークショーを開催。
日時：11月21日(日) 18時～19時半
場所：アップルストア銀座店3F
問：ブラウニー TEL：03-3354-6274

E VENT

WFPチャリティ写真展

『Fill the Cup with Hope～一杯の給食で、いっぱい希望～』

世界には飢えや栄養失調によって命を落とす子どもたちが大勢いる。その現実を知ってほしいと、赤いカップを手にした人気モデルたちが飢餓の撲滅を訴える写真展が開催される。今宿麻美さんや松島花さんなどモデルの面々は皆、無償での参加。赤いカップは、国連世界食糧計画(WFP)が約70カ国で実施する「学校給食プログラム」で食器として使われているモノ。「わずかな食糧が子どもの人生を変える」というメッセージが込められている。

会期：11月23日(火・祝)～28日(日)11時～20時
会場：GYRE(ジャイル)3Fギャラリー(東京・表参道)
入場料：無料
問：認定NPO法人 国連WFP協会
Tel：045-221-2515
URL：www.wfp.org/jp



©N.Miyamoto

B OOK

『ひとりじゃ生きられないニッポン』

知ってるようで知らなかった日本と世界の関係55

衣食住やエネルギー資源、娯楽製品などあらゆる面で世界の国々に依存している日本。その実態を、「セイカツ編」「ケイザイ編」「ヒトの交流編」「カルチャー編」などに分け、豊富なデータとともにまとめたのが本書だ。データの出典元は、2009年にJICAが実施した「日本・途上国相互依存度調査」。調査結果から、身近なモノのほとんどが輸入品であることが明らかとなっている。不景気が長引く日本なのに、なぜ途上国を援助するのか―。これを読めばその答えがひもとけるはずだ。フリージャーナリストの池上彰さんも推薦の一冊。



この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

「ひとりじゃ生きられないニッポン」
制作委員会 編著
文化工房
693円(税込)

B OOK

『イラストで知る アジアの子ども』

ネパール、インド、フィリピンなどアジア諸国の小さな村に生まれた子どもたちはどんな暮らしをしているのだろうか。毎日ご飯を食べ、学校に通えているのだろうか―。本書は、アジアの人々の健康を改善しようと1980年に設立された「財団法人 アジア保健研修財団 アジア保健研修所(AHI)」が、各国のNGOや保健・福祉分野などで働く人々から聞いた話を基に、子どもたちの日常をかわいらしいイラストで紹介したもの。それぞれの国の歴史や政治のほか、紛争、貧困、森林破壊、エイズまん延といった問題についても分かりやすく解説されている。



この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

財団法人 アジア保健研修財団 編著
明石書店
1,890円(税込)



地球ギャラリー vol.26

Mexico

[メキシコ]

文・写真＝篠田 有史(フォトジャーナリスト)

〳〵 名の村で 〳〵 真実 〳〵 という

増水した小川を渡る。チアパス州では
今も馬は大切な交通手段。子どもは
幼いころから馬に乗って遊ぶ



D

D.石ころだらけの山の斜面で、絡みついたツタを払いながらトウモロコシを収穫する
E.村の中央を走る道を、軍が銃で威嚇しながら装甲車を連ねパトロールする(1995年)



E

朝、まだ暗い時間に女性があくびをしながら起きてくる。かまどで火をたき、トルテージャ(トウモロコシの薄焼きパン)を焼いてコーヒーを入れる。しばらくして、夫と二人の息子たちが目覚めると、女性はトウモロコシのペーストを水に溶かしてペットポトルに入れた。この「ポソル」は、畑に働きに出る男たちのエネルギー源となる。ここはメキシコ最南部チアパス州、「真実」を意味するラ・レアリダという名を持つ山奥の小さな村。

朝食を済ませた男たちは、マチューテ(山刀)とポソルを手に、畑へ向かう。歩いて片道30分以上。畑に着いたところ、

ようやく空が明るくなってきた。目の前の斜面にはトウモロコシ畑が広がっている。今日はトウモロコシの実を採る作業だ。きつい傾斜でよろけそうになる体を足で踏ん張り支えながら、マチューテでトウモロコシの周りの草やツタを払い、実を摘んでいく。

1994年1月1日、チアパス州は世界の注目を集めた。NAFTA(北米自由貿易協定)が発効するこの日、先住民たちが武装蜂起ののろしを上げたからだ。500年前にスペイン人が上陸して以来、土地を奪われ奴隷のように扱われてきた先住民は、100年前のメキシコ革命で、一部の大地主から土地を取り戻すも、結局、暮らしは改善されなかった。

そして、ついに「もうたくさんだ!」と自分たちの要求を掲げ蜂起したのだ。NAFTAが発効すれば、安価な農産物が次々に輸入され、農民である彼らの生活をさらに追い込むことになる。先住民たちはチアパスの4都市を制圧。声明を出すと、すぐに撤退した。

これに対して政府軍は山奥の村々へ侵攻。だが、内外の世論に押されて停戦し、両者の対話が始まった。山村で先住民が開いた大規模な集会には、世界中から数千人規模の支援者が集まった。ラ・レアリダもそんな村の一つだ。



1996年夏、ラ・レアリダ村には世界中から約3,000人の支援者たちが集まった



B A



C

A.霧深いラ・レアリダ村の朝。男たちはマチューテ(山刀)を持って徒歩や馬で畑に向かう
B.トルテージャはメキシコの主食。町では大量生産するが、ここでは一枚一枚心を込めて焼く
C.暗い山道を夜露にぬれながら畑に向かう。畑に着くころようやく明るくなっていく

村人たちは報復されないよう覆面をして、軍による圧政や生活の状況を訴えた(1999年)





H. 5月から10月の雨期、ラ・レアリダ村では毎日夕方になると雷を伴う激しい雨が降る(2009年)
 I. 荷物を背負って小川を渡る。袋の中には収穫したサトウキビが入っている(2009年)
 J. 川で洗ってきれいにしたカボチャの種を干す。乾燥したら食べて食べる(2009年)
 K. 民族衣装を着る女性は少なくなったが、ほかは昔とほとんど変わらない洗濯風景



K



小川まで、洗濯しに行く。女性も子どもたちも大抵ははだしだった(1995年)



F

F. 朝、鐘がなると、子どもたちはノートと鉛筆を持って学校にやって来る(1995年)
 G. パン生地を運ぶ子どもたち。村では時々共同の釜でパンを焼いていた(1995年)



G

昨年9月、久しぶりにラ・レアリダ村を訪ねると、先住民の生活は以前とほとんど変わっていない。この間、3度政権交代したが、政府との交渉は進まず、停止している。
 人口の3分の1を先住民が占めるチアパス州は、辺境ではあるが資源の豊富な地域だ。トウモロコシやコーヒーといった農作物に加え、石油や天然ガスなどを多く産出する。これこそ、政府が先住民に自由を認めない理由なのだ。
 資源を持ち去られ、その恩恵に浴するどころか農作物を安く買ったかれ、食べていくのがやっと。これが先住民

の現実だ。
 先住民が求めるごく普通の生活は当然の「権利」。だが、何年たっても変わらない状況に、多くの若者が都会へ向かい、中には国境を越えアメリカへ出稼ぎに行く者もいる。ラ・レアリダ村にはまだ、電気さえない。一部の政府支持者の家には太陽光パネルが支給されているが、蜂起を支持し政府に不満を訴える人々は、灯油ランプに頼るしかない。
 駐留していた軍も姿を消し、一見のどかなラ・レアリダ村だが、真実の村の真実は、世界にはなかなか伝わらない。



メキシコ中小企業の工場を訪問し、部品の管理方法を指導するシニア海外ボランティア(中央2人)



自動車の放置や不適切な解体は環境汚染の原因となるため、廃車を受け取り適切に解体処理する制度構築に取り組んでいる



耐震性を測るための方法をエルサルバドルの技術者(左)に指導するメキシコ人専門家

JICAの活動 in メキシコ

「援助のパートナー」を目指して

日本は、中米カリブ地域で最大の経済規模を誇るメキシコと緊密な関係を築いている。JICAは両国を、両国の経済活動や地球規模の課題解決へ向けた「パートナー」と位置付け、援助国へと成熟させるための協力を展開している。

メキシコと日本の交流の歴史は400年にも上り、近年は国際社会での「パートナー」として緊密な関係を築いている。2003年には「日墨パートナーシップ・プログラム」を締結し、両国は「協力して」他の開発途上国支援に取り組んでいる。そうした中でJICAは、主に産業開発と環境分野で援助を展開。文化的背景が似ている中米カリブ諸国の開発をメキシコがサポートする「南南協力」の支援を通じ、同国の「援助国化」も推進している。

産業開発分野では、05年に発効された「日墨経済連携協定」に基づき、両国の経済関係の強化を図っている。中でも力を入れているのが、全企業の99%を占める中小企業の品質・生産性を向上させ、競争力を高めることだ。現在、製造業を中心に約400の日本

企業が同国へ進出しているが、部品調達・製造元となるこうした地元の中小企業には、品質・生産性向上のための知識や技術が十分に備わっていない。

そこで両国の企業に有益なビジネス環境を整備していくため、JICAは全国製造業会議所や各州政府経済開発局などにシニア海外ボランティア(SV)を送り、地元中小企業の原価・品質・経営管理などを指導。また自動車部品産業に関しては、両国の企業のネットワークづくりを進める独立行政法人日本貿易振興機構(JETRO)と共同でSVを派遣し、今後日本企業との取引の可能性のある企業に訪問、生産現場で直接改善提案を行っている。

他方、環境分野では、大気汚染、水質汚濁、廃棄物管理に対する同国の取り組みを支えてきた。その一例がメキ

シコ・シティーの大気汚染モニタリングや「国家水質基準」の改定などへの協力だ。さらには、3R(ごみの削減・リユース・リサイクル)を取り入れた廃棄物管理、循環型社会の実現に向けた「国家プログラム」や「廃棄自動車管理計画」の策定にも協力してきた。

また「南南協力」支援では、メキシコによる中米カリブ諸国への援助をサポート。例えば防災分野では、1985年のメキシコ地震後に日本から学んだノウハウを生かし、メキシコ人専門家がJICAの日本人専門家とともに建物の耐震技術を近隣国へ移転している。今年1月の地震により、いまだ建物が崩壊したままのハイチに対しても、今後、南南協力を活用した日本-メキシコ-ハイチの「三角協力プロジェクト」が予定されている。



「マリアッチェ」と呼ばれる音楽隊。ギター、バイオリン、トランペットなどの楽器を用いて伝統音楽を奏でる。

地球ギャラリー
Vol.26
Mexico
メキシコ
Illustration / Hori Takao



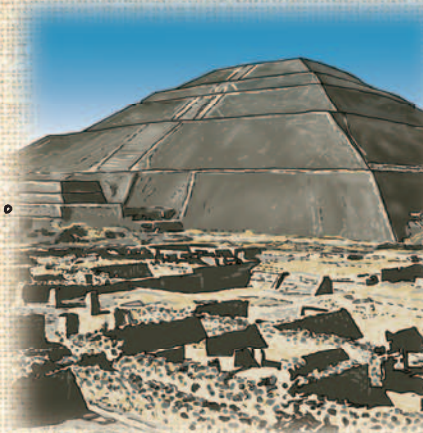
リュウゼツランという植物から作られる「テキーラ」は国を代表するお酒。生産地である中部ハリスコ州のテキーラ村がその名の由来。



首都：メキシコ・シティー
面積：197万km²(日本の約5.3倍)
人口：1億743万人(2009年)
公用語：スペイン語
宗教：カトリック 約90%
1人当たり国民総所得(GNI)：8,960ドル(2009年)
経路：メキシコ・シティーまで直行便で約13時間。
通貨：メキシコ・ペソ(MXN) 1MXN=約7円(2010年10月現在)
気候：北部や中央高原部は乾燥帯、メキシコ湾沿いや太平洋側は温帯、ユカタン半島を含む南部は熱帯気候と地域差がある。6~9月が雨期、10~5月が乾期。



天然資源に恵まれ、石油の産出量は世界第6位、銀は第2位を誇る。また西部には、東京23区の面積に匹敵する世界最大の天然塩田が広がる。



テオティワカン、マヤ、アステカなどさまざまな文明が栄え、国内各地に多くの遺跡が残る。29の世界遺産があり、その数は世界第6位。



エル・リンコン・デ・サム
〒150-0013
東京都恵比寿4-6-1 恵比寿MFビルB1F
TEL: 03-3442-1636
18時~24時
定休日：日曜・祝日
URL: www.sambra.jp/

- ☆辛いのが苦手な人は、チポトレの代わりにパプリカパウダーでもOK。
- みじん切りにしたタマネギとニンニクを、サラダ油でさっといためる。
 - 塩コショウで下味をつけたエビを加える。
 - エビの両面が赤くなったら、テキーラ、サワークリーム、チポトレを入れる。
 - ソースにとろみが出てきたら完成。

テキーラでエビを煮込んだ一品。チポトレのピリリとした辛味をサワークリームでまろやかに仕上げたソースは絶品。ライスかトルティージャにたっぷり付けて召し上がれ。

〔カマロン・テキーラ〕
〔材料(2人前)〕
カラムエビ5尾(頭と尾は残す) / タマネギ6分の1個 / ニンニク2片 / サラダ油大さじ1 / 塩コショウ適量 / テキーラ120ミリリットル程度(エビが浸るくらい) / サワークリーム大さじ3 / チポトレ(パウダーまたはソース)小さじ1(お好みで調節)
〔作り方〕

この店の人気メニュー「カマロン・テキーラ」は、コクのあるチポトレ(薫製にしたチレの一種)と、メキシコを代表する酒「サム」では、本場のメキシコ料理はもろのんこと、毎晩店主のサム・モレーノさんによるメキシカンミュージックのライブが楽しめる。現地の片田舎風に飾られた店内と、メキシコ人を含む陽気なスタッフが温かく迎えてくれる。

東京・恵比寿にある「エル・リンコン・デ・サム」では、本場のメキシコ料理はもろのんこと、毎晩店主のサム・モレーノさんによるメキシカンミュージックのライブが楽しめる。現地の片田舎風に飾られた店内と、メキシコ人を含む陽気なスタッフ

メキシコ料理 テキーラを使ったエビのソテー 「カマロン・テキーラ」



「8月号」「観光開発地域の宝を掘り起こせ」を読んで」

■5年前にコロンボの日本人学校に勤務する後輩を訪ねてスリランカへ渡航しました。その折、シーギリヤロックに登り、そのスケールの大きさと、神秘的な魅力に圧倒されました。今、そこに「シーギリヤ博物館」が完成し、円借款でアクセス道路が整備されつつあるとのこと、5年前は悪路でコロンボからシーギリヤまでかなりの時間を要しました。博物館や周辺の様子を想像し、現地の思いを馳せながら読ませていただきました。
(島根県・56歳・女性・教員・石川鈴枝)

■日本は物にあふれかえっているし、私の家にも多数の靴がある。一方ではポロポロのサンダルしかはけない人がいる。私は職場で発展途上国に物品を寄付する機会があるので、協力しようと思う。
(新潟県・22歳・男性・会社員)

「9月号」「中南米と日本のさすな果実―広がる関係」を読んで」

■支え合う中南米と日本を読んでさまざまな課題があることに気づきました。中南米支援の三角協力のこともはじめて知りました。これからも支援の輪が広がっていくことを期待しています。「万人に水を」のスローガンのもと私も身近なところからできることを始めていきます。
(兵庫県・45歳・女性・主婦・野崎まなみ)

■自分のまわりにも中南米出身者がおり、日本と深い関係があることは知っていたが、その結び付きを具体的に知り、改めてその関わり方の強さに驚かされた。特に防災関連の技術については、日本から伝えられることの1つとして支援できることを切に願う。
(新潟県・25歳・男性・嘱託職員・小林透)

本誌へのご意見・ご感想や
JICAへのご質問を
お寄せください。

プレゼント
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2010年12月15日

Email: jica@idj.co.jp
FAX: 03-3582-5745 (『JICA's World』編集部宛)

- ① エジプトのハンディークラフト
- ② 書籍『ひとりじゃ生きられないニッポン』(p30参照)
- ③ 書籍『イラストで知る アジアの子ども』(p30参照)



①



②



③

本誌をご希望の場合は
下記方法で
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形でご送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払ください。入金確認後、発送手配をいたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 業務部(発送代行)
住所 〒107-0052 東京都港区赤坂2-13-19 多聞堂ビル
TEL 03-3584-2191
FAX 03-3582-5745
Email order@idj.co.jp



次号予告 (2010年12月1日発行予定)

鉄道

日本が誇る世界トップレベルの鉄道技術を活用した途上国支援の歴史と現状を伝えます。



©Yuki Asada

エジプトでモノづくり大作戦!

さんさん
燦々と降り注ぐ太陽の下、カイロ市内の広場に色とりどりのテントが並ぶ。週末恒例のバザーの日。何か掘り出し物はないかと、人々が楽しそうに行き交っている。

その中で、エジプトらしい異国情緒あふれる小物がひととき目を引いた。店先で立ち止まるお客に説明するのは、国内で活動する青年海外協力隊員たち。店の名は「EGYPTIAN HANDICRAFTS」。JICAボランティアが中心となって立ち上げたモノづくりブランドだ。

長年にわたり、エジプト各地でモノづくりを通じた職業訓練を支援してきたJICA。しかし、「せっかく良い製品がで

きても、販路を定着させるのが難しかった」と、JICAエジプト事務所の石島和彦さんはいう。そこで設立されたのが「EGYPTIAN HANDICRAFTS」。JICAの支援を通じて生まれた製品に共通のロゴを付けてブランド化し、品質改善、販路開拓、ディスプレイ、包装などに協働で取り組む。

協力隊員と共にモノづくりに励むのは、地元の女性、ストリートチルドレン、障がい者たち。ナツメヤシやオリーブ、羊毛など、各地域の素材を活用した新製品は、品質の良さにも定評がある。

次のバザーではどんな製品に出会えるのだろう。そんな楽しみが、カイロ市民の間に広まっている。



バザーで製品を販売する協力隊員。安定した収入確保のため現地企業とのタイアップも構想中だ



シニア海外ボランティアによるデザイン。重なり合う手と手で形作られたハートの真ん中に、古代エジプトを象徴する「ホルスの目」を描いた

★マグカップを1人、コインケースを2人、ティッシュケースを1人の方にプレゼント!詳細は38ページへ→





私の
**なんとか
しなきゃ!**

Vol. 3

PROFILE

1959年神奈川県出身。大学時代にセルフプロデュースのアルバムを発表、ソロデビューを果たす。TBS系ドキュメンタリー番組「世界遺産」のテーマ曲「The Song of Life」などヒット曲多数。日本初のミュージックドネーションプロジェクト「BEYOND THE BORDER PROJECT」に参加。「なんとかしなきゃ! プロジェクト」著名人メンバー。

幼稚園の時に初めてギターを手に取り、いつの日からか、自然とミュージシャンとして生きる道を選びました。振り返ってみると、若いころは自分のことに一生懸命になって、「社会貢献」とか「国際協力」という言葉を耳にしても、自分から積極的にかかわっていくことはなかったように思います。

多かれ少なかれ、音楽業界は、どこか浮世離れしている部分があるんです。いわゆる芸事ですから、いかに自分の世界観をつくり出し、才能をブラッシュアップしていくかがカギになります。社会的メッセージ性のある楽曲を制作することもあります。世界で起きている出来事とか離れた空間に生きている人が多いのではないのでしょうか。

そんな僕たちの心を大きく揺さぶったのが、2001年のアメリカ同時多発テロです。メディアから流れてくる

音楽を通じて豊かさを伝えたい

ギタリスト 鳥山 雄司

TORIYAMA Yuji



photo by Shinichi Kuno

映像だけでなく、アメリカのミュージシャンの友人たちからも現地の惨状について聞き、これは遠い国の話ではない、僕たち自身の問題でもあると実感したのです。

言うまでもなく、人間は自然に生かされている立場ですから、自然界で起こっている変化には太刀打ちできなくても仕方がないんじゃないかと思っていたんです。でも、テロとか紛争は違います。最近、人為的な出来事によって、世の中がどんどん物騒になってきているのを感じる。それをどうにかできるのは、人間しかない。その事実から目を背けていられるでしょうか。

僕はミュージシャンなので、やはり音楽を通じて協力することが理にかなっているというか、使命だと考えています。そのきっかけを与えてくれたのが、「BEYOND THE BORDER PROJECT」です。ホームページを通

じて曲をダウンロードすると、その収益がNGOの寄付に回されるという仕組み。国際協力初心者の方にとっても、ファンの方にとっても、世界を変えるために行動する道筋を描き出してくれたプロジェクトでした。

今を生き抜くために、音楽は絶対に必要なものではないかもしれませんが。途上国の人たちにとっては、毎日の水や食料の方が大事かもしれない。でも本当は、彼らにも音楽に触れることで得られる“喜び”や“豊かさ”を感じてほしい。心が豊かであれば、どんな厳しい現状にも立ち向かえる気がするから。そのお手伝いを少しでもできればと思っています。

「なんとかしなきゃ! プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトを中心に、さまざまな国際協力のカタチを提案していきます。[なんとかしなきゃ.jp](http://nankashinaky.jp)
詳しくはこちらから→